多摩市立図書館本館再構築基本構想

平成２９年３月

多摩市教育委員会
多摩市立図書館

まえがき

多摩市立図書館本館は、昭和４８年の開館以来、多摩市役所に隣接する場所で活動していました。

しかし、施設の耐震上の問題などから、平成２０年３月に、現在の場所である旧西落合中学校校舎に最小限の改修を行い、暫定的に１０年間使用する予定で移転しました。その期限もまもなく迎えようとしていますが、利用者の利便性の面でも、全館を支える書庫などのバックヤード機能の面でも、今後の図書館サービス全体を支える本館としては不十分といわざるを得ません。

平成２８年５月に策定した「多摩市読書活動振興計画」でも、本館再構築に取り組むべきことと位置づけています。また、これまで中央図書館の整備については、市の総合計画等でも位置づけられてはいましたが、財政上の理由から宙に浮いたままでした。

本館の再整備にあたっては、単に本館という施設を建て直すだけではなく、多摩市立図書館のサービス全体を俯瞰した上で行うべきと考えます。多摩市立図書館の運営については、様々な課題があり、市議会での事務事業評価でも指摘され、「多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム」の公表と、市民の方々からも多くの意見をいただいたという経緯もありました。本館の再構築の中では、これらの運営上の課題も含めて、図書館ネットワーク全体を見直す必要がある状況でした。

このような背景の中、整備用地も具体化する状況が見えてきたことをきっかけとして、多摩市立図書館本館再構築基本構想策定委員会を設置し、多摩市立図書館のネットワーク全体を見据え、分館などの機能の役割分担を考えた上で、新たな本館の再構築に向けて、必要な機能の提言をいただくこととしました。

全７回にわたる委員会では、全館の視察や、図書館に関わっていただいている皆様へのグループヒアリング、市民フォーラム、パブリックコメントなどの市民の皆様の意見を参考に、熱のこもった議論をいただき、その成果として、この基本構想をいただきました。

新たな本館の整備に向けては、今後も基本計画や設計などの作業の中で、財政面、運営面など、現実的な裏づけが必要ですが、この構想は、その方向に向けての大きな指針、ビジョンになると、教育委員会としても大変ありがたく受けとめています。

最後に、基本構想の策定にあたって審議いただいた策定委員会委員の皆様、策定過程におけるヒアリングやパブリックコメントにご意見をお寄せいただいた皆様、策定委員会を熱心に傍聴いただいた皆様に感謝を申し上げるとともに、今後とも新たな本館の整備に向けてご支援をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成２９年３月
多摩市教育長　清水　哲也

はじめに

時代の変化というものは、予測するのが難しい。たとえば、 1970 年代前半における米国のドルの凋落や石油危機、 1990 年代初頭のソ連の崩壊と東欧の解体、日本におけるバブル経済の崩壊と長期不況の到来など、時代を画する変動は、いずれもほんの２～３年前までは、いわゆる有識者と言われる専門家の中でさえも予測していた人はほとんどいませんでした。

ただ、現在日本で深刻化しつつある高齢化の急速な進行、核家族化と少子化の固定化、都市と地方の経済の格差の拡大については、かなり前から予測されていました。特に高齢化社会の到来については、２０年以上も前から議論されてきた問題なのですが、高度経済成長の中心的担い手となってきた団塊の世代が、現実に高齢者層に入り始めた今になってみると、高齢化の波は予測をはるかに超えた重大な問題を社会的にも個別の家庭においてももたらすものであることが、ようやく痛切にわかってきました。時代の変化というものは、非情なまでに厳しいものです。

多摩市がこれから建設しようとしている中央図書館をどのようなものにするかを考えるにあたっても、現在の市民のニーズに応えようとするだけでは、１０年も経たないうちに、市民から古びた図書館と見られるようになりかねません。２０年後、３０年後に多摩地区を真に住みやすいまち、老いも若きも知的にも感覚的にも楽しく納得感・充実感のあるまち、ふるさととして永住したいと思えるまちにするには、どうすればよいかという発想をベースにして、その大きな枠組みの中で、地域の知の拠点、文化の拠点である図書館はどうあるべきかというビジョンを描き出す必要があると思うのです。

国は衰退する地方を再生させる方策として、地方創生というキーワードを使って、各地から出される施策のアイディアに財政支援をする取り組みをしていますが、提案される施策のほとんどは、地方の経済振興を目的にしたものです。しかし、世界の政治・経済の趨勢を見ても、成長する業種の偏りを見ても、日本の経済が高度成長期のような形で全国的な規模で所得水準を拡大するのを期待することには無理があるでしょう。

そこで考えるべきは、人間が日常の暮らしの中で、たのしさや喜びや幸せ感を感じるのは、どういう時なのかという、生きることの原点に立ち戻ってみることでしょう。もちろん経済は重要ですが、それだけにすがるのでなく、たとえ経済的にきつくても、人々が「きょうは楽しかった」「心が癒された」「生きる力を得た」と言えるような、人と人とのつながり、支え合い、心に響く催し、知的な刺激を受ける文化的施設などが根づいた地域社会を築くなら、そういう地域こそ人間性の豊かなまちと言うことができるでしょう。

さらに、安心して子を産み育てられる、病気でも障害があっても安心して生きられる、年老いても安心して生きられる、子どもも大人もいじめや差別を排除する心を浸透させている、といった社会であれば、誰もがそのまちに住み続けるに違いないでしょう。

以上のようなまちづくりを目指すことを、当委員会では、「知の地域づくり」あるいは「知の地域創造」というキーワードで表現することにしました。ここで言う知とは、知識のことだけではない。情報、知識、知恵、知性のすべての意味を含めています。

新たに建設する中央図書館は、そのような意味をこめた「知の地域づくり」の様々な事業を展開していくためのセンター（中心拠点）機能を果たしていく施設にしようというのです。たとえば、がん制圧月間というと、保健所や市の保健部門の業務と考えられがちですが、図書館ががん啓発の解説展示や書物展示などをして市民の健康増進の役割を果たすとか、著名な作家が没した時には特別展やシンポジウムなど文学館的な役割を担うとか、市内の若者のミュージックグループとの協働でロックの歴史と広がりの展示とライブ演奏会を開くとか、高齢者の心を豊かにする絵本の連続講座を開くとか、乳幼児精神保健の専門家の協力を求めて出産前の若い母親たちに胎児に絵本を読み聞かせをするマタニティブックスタートの実践講座を企画する等々、“撃って出る図書館”の役割を担うようになれば、まさに地域住民と図書館とが一体感を強めることになると思うのです。

特に、新しい中央図書館の開かれた役割という点で重要であり、「知の地域づくり」のセンター的機能のイメージ形成に重要なのは、中央公園との一体化によって、遊歩道沿いに文化的展示を設けて、散策しながら文化的教養を吸収できるようにするとか、公園で遊んだ親子が気軽に立ち寄って読み聞かせをすることができる小規模な児童書の館を設置するとか、図書館の周辺に緑陰読書を楽しめるカフェやベンチを配置するなどの取り組みです。この風景は、多摩市を「文化の香りのあるまち」「子どもも老人も心豊かに生きられるまち」として、市民の記憶に刻まれるでしょうし、全国から注目されるようになるでしょう。

この基本構想の提言は、以上のような熱い思いをこめて、全７回、毎回３時間以上の時間を費やして、全委員によるひたむきな議論を経てまとめられたものです。今後は、この提言をベースにして、いよいよ行政レベルでの建設計画の策定がなされることになりますが、その建設計画の中でこの基本構想が描き出した 20年、 30年後を見据えたビジョンが十分に生かされ、全国のどこにもない先駆的な図書文化センターが生まれることを切望します。

多摩市立図書館本館再構築基本構想策定委員会
委員長　　柳田　邦男

多摩市立図書館本館再構築基本構想立案までの経緯

昭和48年（1973）開館に始まる多摩市立図書館は、自動車図書館やまばと号を市内２０か所のサービスポイントに巡回させて、全市全域奉仕の方針を明らかにしながら、その図書館システムを成長させました。諏訪、東寺方、豊ヶ丘、関戸、聖ヶ丘、永山、唐木田と順々に生まれた図書館は、本館を頂点とした組織体の下位の分館としてではなく、それぞれの地域の暮らしに向き合った地域図書館であり、それらの連帯の形が多摩市立図書館そのものであったということができるでしょう。

平成２年（1990）に「（仮称）多摩市立中央図書館基礎調査」の研究があります。開館１７年、理念的な図書館システムの青年期を経て、状況の課題や成長の方向性を考えたときに、全体を力強く支え動かす中枢機能と市民の高まる要求に応える専門性をそなえた中央図書館の必要性が提言されたのです。図書館政策で一歩先を行く国内や外国の都市の図書館が、選択して実績を証明している施策の方向性でもありました。

以後、多摩市は具体化の方策を模索し、市民グループも図書館との奉仕協力に加えて研究会や市民的共感づくりに取り組みますが、人口減少や高齢化や地方自治財政の縮小など成長管理型社会への移行が、時代状況の中心課題となり施策が足踏みします。国が推奨する都市政策の方向性もあり、平成25年（2013）多摩市は「多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム」を市民に示しました。近い将来の公共施設建て替え更新にはじまる財政負担の危機を予測し、持続可能なまちづくりを行政と議会が研究議論したビジョンの市民への提示でした。ここに、図書館本館の再整備と地域館４館の廃止が提示されます。これは施設削減を越えて、これまでの図書館政策の理念の変更や身近な暮らしを支える施策の後退と見えて、各地の多くの市民が異議を表明し、陳情や要請署名を１万５千筆以上、市へ提出する等の運動を展開しています。４０年の多摩市の図書館の歴史を振り返ると、図書館サービスをおだやかに享受する幸いな情景がありましたが、それぞれの地域館に利用者友の会が生まれるなどの地域図書館と市民が向き合い支えあう運営の常態は育ちませんでした。しかし記録をさかのぼれば、当初、多摩市立図書館が掲げた理想は、現代の図書館の３原則に加えて「自律した市民の存在」でありました。この度の図書館奉仕に関わる行政と市民が重ねた議論や思いは、根源的理想を確かめる出来事とも思われます。

※現代の図書館の３原則
・図書の貸出奉仕の重視
・子どもサービスの重視
・全市全域サービス重視

※近年の全国の事例では、行政に招集された形ではない図書館友の会誕生と協働が増えている。

平成28年（2016）7月、いくつかの社会状況の変化や多様な市民意見の反映もあり、多摩市は「公共施設の見直しと将来像（行動プログラムの見直し）」を提示します。当面は現状地域館を存続し、本館再整備など多摩市の図書館全体像を市民とともに考えてゆこうという提案です。さて、前述の社会状況の変化とは以下の４点です。

・H25秋. 市財政の展望をふまえた「行動プログラム案」の分館縮減案に大きな市民反響と行動。
・H26夏. 都市計画税の使途を緩和する法改正により、市財政計画の前提と展望に状況変化。
・H27秋. 鶴牧倉庫跡地整備案の進捗困難な状況に、優良条件の適地の取得可能性が生まれた。
・H28春. 多摩センター地区の、中央公園、パルテノン多摩、図書館新本館（中央館）を連携する再整備の方針が公表され、それぞれの検討が始まる。

※行政の提示した縮減案、住民運動の経緯と概要、見直し案までの３年間の出来事は、多摩市の住民史や今後の再編にとっても重要であり、本構想に具体的記載をという意見が、最終策定委員会に出ました。本委員会でも配付資料とし、詳細を確認してきました。これらは、基本構想の資料編に再掲し記録と致します。

本調査「多摩市立図書館本館再構築基本構想」は、図書館に関わる市民団体や施策につながる行政部局へのヒアリングを基礎資料として、７回の策定委員会での協議を整理編成するかたちで提言としてまとめられています。また、議論と編成の進め方については、以下の３つの原則をふまえたものとなっています。

○H23「多摩市立図書館の基本方針・運営方針について」とH28「多摩市読書活動振興計画」を「本館再構築基本構想の基盤」として策定委員会は議論する。
○H22図書館協議会「多摩市における中央図書館機能およびその整備のあり方について(答申)」を「本館再構築基本構想の骨格」として策定委員会は議論する。
○「市政世論調査や各種アンケート」「公共施設の見直し方針と行動プログラム更新案に係る市民説明会やパブリックコメント」「グループヒアリング」など、これまでの図書館政策への市民意見をふまえ、素案への意見も積み重ねて、基本構想素案を策定委員会は議論する。

※新たな敷地に再整備された新本館を、多摩市立中央図書館と呼ぶことも考えられます。

構想検討の終盤に基本構想原案は、市民フォーラムやパブリックコメントなど広報公聴を経て、策定委員会で再調整され構想提言となります。多摩市立図書館の将来像に、本構想が市民的共感を得て、図書館システムの成長に資することを目的とします。

まえがき 0-01

はじめに 0-02

構想立案の経緯 0-04
・本館再構築基本構想までの経緯／基本構想議論の３つの方針

序　章　「知の地域創造」のために 0-06

第一章　多摩市民の図書館のいま 1-01

1-1. 多摩市のいまと図書館政策 1-02
1-2. 多摩市の図書館サービスの現状 1-04
1-3. 多摩市の図書館サービスの課題 1-06
（現況と課題チャート） 1-08
1-4. 多摩市の図書館政策研究の経緯 1-10

第二章　多摩市民のめざす図書館 2-01

2-1. 「知の地域創造」のための図書館 2-02
（基本方針と５つの運営方針）
2-2. 図書館システムとしての多摩市立図書館 2-04
2-3. 再生まちづくりの担い手となる図書館 2-06
2-4. あたらしい多摩市立図書館全体への提言 2-07
（提言チャート） 2-08

第三章　多摩市民を支える中央図書館 3-01

3-1. 中央図書館整備の「使命」そしてあらたに 3-02
3-2. 基本的図書館サービスの深化と
高度に専門化された新しいサービス 3-04
3-3. 中心地区につながる開かれた中央図書館 3-06
3-4. 市民協働で「もの」と「こと」のデザインを 3-08

第四章　中央図書館づくりの進め方 4-01

4-1. 図書館計画に欠かせない４つの視点 4-02
4-2. 資料世界構築と開架室の配架表現 4-03
4-3. 大切な図書館員の専門性と職員組織づくり 4-04
4-4. 機能的/快適/魅力的/経済的な施設づくり 4-05

策定委員会の経緯と構成 5-01
おわりに 5-03

別冊　資料編　基本構想策定の経緯と記録
（１）基本構想策定委員会の進み方
（２）各回協議のテーマ・検討資料
（３）グループヒアリング意見報告
（４）策定委員会協議の要点録
（５）基本構想原案の広報公聴記録

別冊　基本構想概要版 （Ａ3版全2頁）

第一章は多摩市の政策や図書館サービスの現状を整理して、良い面を深めつつ課題解決を考える　次章への種をまとめています。

第二章は多摩市の全体の図書館サービスのしくみ（図書館システム）の将来像、また、全市まちづくりとの関係を提言しています。

第三章は全市の図書館サービスの充実を支えつつ、高度で専門的な情報や多様な活動の場を提供する中央図書館像を提言しています。

第四章は図書館サービスの軟らかな基本方針を概観する基本構想から、建設と運営の具体的プログラムとしての基本計画に向けて、重要な視点と検討課題を整理して申し送りしています。

序章　「知の地域創造」のために

（１）「知の地域創造」センターの構想

多摩中央公園に生まれた「知の地域創造」センターでは、晴れた日にはテーブルと椅子があちこちに置かれ、木陰でカフェを楽しみながら本を読んだり、おしゃべりを楽しんでいます。公園の大池に面した「大芝生広場」では、家族連れがまだ暗い時間からテントを張り、周りの樹の根元で懐中電灯を手にして、セミの羽化を観察しています。観察が終わると創造センターの机で、自由研究のまとめです。

朝の時間帯は、２階でお年寄りが新聞を読む静かなスペースから、公園の向こう側にパルテノン多摩の円柱が望めます。パルテノン多摩の公園側にも、図書館員が選んだ本が配置され、定期的に入れ替えがされています。そこから創造センターまでの道すがら、ところどころで文化財や本の展示が楽しめます。

創造センターの公園側は、公園に溶け込んだデザインで、人々が自由に出入りしています。入り口から入ると、広いギャラリースペースには、古民家と呼応するように縄文土器に活けられた花などの文化財展示や、市民の写真作品が並んでいて、市民のひろばになっています。

このギャラリーは、週に１度は、若者向けのライブスペースに早変わり。パルテノン多摩のサブステージとして親しまれ、デジタルサイネージの画面には、パルテノン多摩のイベントが映し出されています。

午前中からベビーカーを押す親子連れが、にぎやかな１階のフロアに集まり始めました。これからどこにでかけ、どこでランチにするか、本やインターネットで調べています。

午後になると、保育園児がおはなし室にやってきて、本のよみきかせをしてもらっています。障がいのある子どもも、マルチメディアの絵本や布の絵本を大きな声を出して楽しみ、集中しています。

夕方、取引先を回ったビジネスマンがパソコンを使って判例関係のデータベースで調べ物をしています。

学校帰りの学生も、みんなで話し合ってまとめをしていましたが、今は気分転換に、マルチメディアブースで多摩市を舞台にしたアニメを楽しんでいます。

あたりが暗くなると、ぼんぼりのように、創造センターが遠くからでも浮かび上がり、そこに行けばだれでも受け入れ、何か見つかるような気がします。

この創造センターに集まる人々は、様々な活動を目にして、本やインターネットで調べ、仲間になったり、教えたり、触発されることで、グループでも、あるいはひとりひとり個室に閉じこもったままでも「知の地域創造」の一員になっています。

この公園を囲む一帯には、心を豊かにしてくれる仕掛けがあふれています。

ひとつひとつのサービスは、海外の図書館や日本の先進的な図書館では、既に実現しているものが少なくないでしょう。でも、多摩中央公園のような広い緑と開かれた青い空の下にそれらを集中させ、様々な文化や芸術を楽しめる「知の地域創造」センターは、他にあるでしょうか。

デジタルサイネージ(電子看板)　：は、プロジェクターやモニターに動画や映像や情報を映し出す装置、表現媒体のこと。

（２）多摩センターという「知の地域創造」の舞台

昭和４６年に多摩ニュータウン一次入居が開始され、京王線、小田急線、多摩都市モノレールが開通。複合した都市機能を有する商業・業務の多摩ニュータウンにおける中心地として、「多摩センター」と名付けられました。

そして、視点をずらすと「多摩センター」は、パルテノン多摩に縁取られた多摩中央公園ができたことで、公園を中心とした生活・文化・芸術の拠点としても生まれ変わり、今日に至っています。

わが国の高度成長期を乗り越えてきた多摩ニュータウンは今、少子化、高齢化の波の中で、経済面でも生活環境の面でも再生に取り組まなければならない時期を迎えています。そのような時代の転換点の中で、多摩市の文化・芸術の中心となってきた多摩センターも、旧来の図書館の枠を超えた「知の資源を集積したセンター」としての新たな図書館を中核に据えることで、「知の地域創造」の拠点として変貌させるならば、「のびやかに生きられるまち」「誇れる故郷のまち」のシンボルとさえなります。冒頭に掲げた将来像は、今すぐには、すべてを一挙に実現できなくても、新たなニーズに支えられて、行政と市民が二人三脚ですすめることで、今と将来の多摩市民の「知の資源」が耕されて、他には類を見ない心の豊かなまちづくりの道しるべとなるでしょう。

（３）「知の地域創造」のビジョンに一歩近付くために

この策定委員会では、単に中央図書館の機能を検討するのではなく、図書館ネットワーク全体をまず考えることとし、検討を進めました。
その過程では、ヒアリングによる、市民や図書館員、行政などの様々な意見があり、これまでのアンケートの結果があり、各委員からの提言や議論がありました。そして、「若者」「子どもの空間」「子どもの心の発達」「ベビーカー」「絵本」「障がい者とバリアフリー」「お年寄りの心の拠り所」「コミック・アニメなどの新しい表現ジャンル」「インターネット」「公園との一体化」「文化財」「古民家を活かす」「新しい図書館像」などのことばがつむぎ出され、新しい中央図書館のイメージが膨らんでいきました。

その中で、今の図書館ができないことや、図書館の外（そと）にあるものと「連携」するのではなく、さらに視座を１段高くとってそれらを包含して考えること、これまでの図書館のイメージからはみ出した、公園やパルテノン多摩、近隣の大学に囲まれた環境や、アニメやインターネットも含めたメディア、これまでに利用していない市民への配慮などへと広げたうえで、「知の地域創造」センターとして、さらに「のびしろ」を広くとって考えるべきだとの提言がありました。

「『知の地域創造』センター」。それは今の段階では　必ずしも全体像を漏れなく描くことは困難ですが、大切なことは、可能な限り希望に満ちたビジョンを描き出すことでしょう。もちろん、１０年後、２０年後、３０年後には、子どもたちや若者のニーズのシャワーを浴びて、今は想像できないような形に変容していくことと思います。
今この基本構想でイメージを描けるのは、そのセンターの核となる、中央図書館のビジョンです。この基本構想では、将来を希望をこめて大胆に構想しつつ、第一章からの四つの章で、多摩市の図書館ネットワーク全体から、中央図書館の機能へ、そして今後の基本計画という現実の施策へと、フォーカスを絞っていくこととします。

第一章　多摩市民の図書館のいま

この章は、多摩市の政策や図書館サービスの現状を整理して、良い面を深めつつ課題解決を考える次章への種をまとめています。

1-1. 多摩市のいまと図書館政策
1-2. 多摩市の図書館サービスの現状
1-3. 多摩市の図書館サービスの課題
1-4. 多摩市の図書館政策研究の経緯

1－1．多摩市のいまと図書館政策

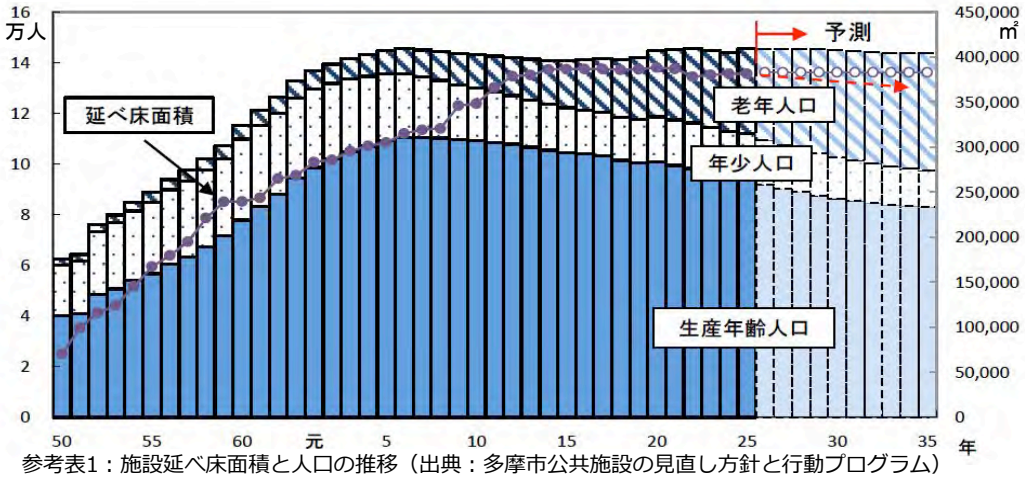
（1）多摩市の都市環境と１５万都市コミュニティの魅力

平成28年の今、各種既往統計調査から多摩市の地域社会を下のように俯瞰します。

・昭和40年代から開発された多摩ニュータウン区域は市域の6割を占めて、多摩市は成長し、そのコミュニティは平成２年頃には14万人都市となっています。
・平成に入り四半世紀の人口はほぼ横ばいの微増減状態ですが、平成14年のボトム14万人から、平成28年の14.8万人に、団地の建替え更新もあり社会増がみえます。
・世代構成では平成に入り生産年齢が減少、年少人口は微減、老年人口は1.5倍増となっているが、団地建替えで世帯増や若い世代の誘導など新施策が進みます。
・順次団地を建替え更新する期間の人口の社会増減はありつつも、住環境の魅力と四半世紀のトレンドで俯瞰すると、近将来の多摩市を15万人都市と想像できます。
・暮らしを支える社会施設は、団地開発にともなう公共公益施設整備で整えられて、既成市街地の行政に比べ大きな負担はなくその後の公共施設拡充が進んでいます。
・過疎化高齢化と地方自治縮小に直面する地方他都市とは様相が違うが、行政規模調整、税収財政の縮小、40年を経た公共施設の建替え負担、など全国共通の行財政改革が表明され、住民サービス低下の賛否と対立して官民議論が争鳴しました。
・非住居系用途の変化としては、40年代計画の児童発生率が沈静し学校減と種地化、災害に強い地勢から大学やIT関連業種の立地集積など別の成長性を予感させます。

※多摩ニュータウン再生の団地建替えが進んでいる。人口や年齢構成に関わる戸数増や若い所帯の移入を促すため、暮らしやすく魅力的な多摩市の自己表現も求められる。

※在住市民が評価している多摩市行政サービスの筆頭に図書館があげられる。市民の要求に応えられる現状図書館再構築整備も次の時代の社会インフラとして多摩市民を支える。



参考表1：施設延べ床面積と人口の推移（出典：多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム）

（2） 第五次総合計画の時代に・・・都市施設の更新と財政計画の見通し

平成25年「多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム」の状況認識と、平成28年更新表明と各地での状況説明では、大きな状況認識の変化がありました。

・都下26市比較で市民1人当たりの公共資産額（将来の更新維持の負担）は１位です。前述の都市形成時の順調な公共施設整備は建替え更新時の負担規模につながります。
・大局的かつ長期的に行財政と公共サービスの点検と適正規模化が必要とされました。自治財政支出の大きな割合が行政サービスの人件費であり常に点検改革が必要です。
・少子高齢化と住民税の減収傾向は、大規模改修施設面積が全体の77％となる平成35年に行政対応がゆきづまる、などが、行政と議会の研究から観測されていました。
・平成25年策定後の下記の４つの環境変化によって、近将来にはパルテノン多摩、エコプラザ多摩、中央公園、図書館新本館整備、市役所の整備事業が予定されます。
　○ 多摩N.T.再生方針(H28)と団地建替え更新と子育て世代の流入促進。学校跡地活用。
　○ 都市計画税（市税収入の６％）の使途への規制緩和(H26)が財政予測を変えました。
　○ 「健幸都市・多摩の創造」の旗印のもと既存公共施設の機能複合化や転換の方針。
　○ 行動プログラムに対する陳情、地域施設存続要望を大規模改修する時期まで再検討。
・図書館の施設では、４つの地域館が廃止され、2つの拠点館と本館再整備(行政資料室機能存続)の体制に集約する方針が撤回され、当面施設数は存続し検討されます。
・全体図書館システムのありようと本館再整備（新中央館）方針については、図書館サービスの施策が重要であり、基本構想策定と以降の計画にゆだねるとしました。

※平成23年第五次総合計画は、少子高齢化と人口縮小による地方自治行財政の縮小化予測に対応したコンパクトシティの理念がその基礎に想像される。

※多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム～少子化・超高齢化社会に向けた持続可能なまちづくりのために～
平成25年11月　多摩市

※多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム～少子化・超高齢化社会に向けた持続可能なまちづくりのために～更新案（総論）（各論）
同　地域説明会資料
平成28年9月更新予定
多摩市

※図書館計画は「ものの計画」よりも「ことの計画」が先行する。また、「どうつくるか」よりも「なぜつくるか」が先行されるべきです。

（３） 行財政運営からみた図書館政策とマネージメントへこれまでの指摘

昭和48年開館以降、多摩市民の暮らしを支える図書館サービスをめざした活動で、貸出やリクエスト対応の高い実績を多摩市立図書館は続けています。しかしながら、多摩市読書活動振興計画には、図書館運営側から見た図書館が抱える７つの課題が整理されていますし、市行政と多摩市議会からは、教育委員会に対して、以下のような「図書館の運営に対する指摘」があることが記載されています。

※多摩市読書活動振興計画～市民の読書活動を支える取り組みと土台となる図書館の運営について～平成28年5月　多摩市教育委員会

・平成23年4月の唐木田図書館開館に際しては、窓口業務委託を採用した。
図書館の機能、運営方法等全般についての抜本的見直しが必要。
今後の図書館運営についての考え方を示すよう求める。

※多摩市立図書館の７つの課題については、後段の整理による。

多摩市議会からは、以下の４点の評価があります。

・平成23年度決算における事務事業評価において、現状維持による図書館行政の発展向上が考えにくいことの検討を要する。
・公共施設総量見直しの視点から、全図書館で同一均質のサービスを提供することについても検討を要する。
・「目指すべき図書館像」を明らかにし、具体的処方箋を描くべきこと。
・財源のみでなく人的資源も先細りの現実を直視し、公立図書館の質向上につながる最適サイズを考えるべきこと。

※多摩市立図書館の７つの課題については、後段の整理による。

平成28年、図書館運営の基本方針は直営がのぞましいと市長発言がありました。これらもふまえて、今後、図書館運営の課題の解決策や体制再編の研究が、財政計画や人事計画との調整を含めて組み立てられることでしょう。研究は、本館再整備と立ち上げ期間の計画と、多摩市の図書館システム体制の経常的計画を意味します。

※多摩市立図書館の運営は直営でゆくという市の方針の正式な機関決定は、現状ではされていません。

（４） 総合計画に位置づけられてきた暮らしを支える多摩市の図書館政策

多摩市の都市政策では、これまで、図書館政策が重視されてきました。そして図書館をサービスの仕組みとしてとらえ、全域のサービスネットワークについても的確にその方針が述べられてきました。それは市民と行政の共通の図書館観と言えるでしょう。市民はそのように図書館を理解し、行政も政策を手段としてではなく理念として、近年まで理解されてきたことが以下に読み取ることができます。

※平成27年度多摩市の一般会計に占める図書館歳費は1.16%、6.3億円です。この比率は多摩市が図書館政策を重視している証として内外から評価されてよいところです。

※他方、図書館歳費に占める人件費率は74%と上昇傾向で、結果として年間資料費は圧縮され図書館の魅力化に十分な政策投資が活かされていません。
この度の本館再構築は全体の図書館経営を見直し、多摩市全体の図書館を活性化する取り組みと位置づけられるでしょう。他市との比較などふまえ改革の研究が望まれます。

○平成３年～「第三次多摩市総合計画　基本計画」
平成８年～「第三次多摩市総合計画　21世紀に向かう新たなまちづくり」
・図書館ネットワークの整備：　中央図書館と地区図書館それぞれが機能を補完する有機的な図書館網の構築に努めます。また、市内公共施設、都立図書館、国会図書館、他市の図書館および大学とも連携してネットワーク化に努めます。
・中央図書館の建設：　市民の自発的な学習を資料面から支える中心施設として多摩センター駅周辺地区に中央図書館を建設します。
・地区図書館の建設：　市内のどの地域に住む住民も、図書館を身近に利用できるよう地区図書館を建設します。

※平成３年～
第三次総合計画の
図書館政策の記述。

○平成13年～「第四次多摩市総合計画　基本計画」
・図書館ネットワークの充実：（省略）
・地域図書館の整備：　市民が身近に図書館サービスを利用できる地域図書館として「（仮）唐木田図書館」を建設します。
・中央図書館機能の整備：　市民の学習を支える基幹的な役割を持つ図書館については、従来の身近な図書館サービスの充実に加え、高度化、多様化する市民の要求に応えるために、図書館ネットワークの中心的機能、増大する資料を整理・保管する図書館資料センター機能および資料や情報の収集・提供・調査・研究などの市民の学習を支える機能などを有する中央図書館機能の整備に着手します。また、既設の地域図書館との図書館サービスの役割分担や運営について見直しを図ります。

※平成１３年～
第四次総合計画の
図書館政策の記述。

○平成23年～「第五次多摩市総合計画　基本計画」
○平成27年～「第五次多摩市総合計画　第2期基本計画」
・学習環境の整備：「多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム」の実現を図りつつ、時代に合った学習情報環境を整備することにより、多様な価値観の中で、市民が必要な情報を得られるようにする為、図書館のあり方について分散型から集約型に向けた検討を進めます。あわせて地域での図書館サービスに関する市民活動を進めます。

※平成２７年～
第五次総合計画の
図書館政策の記述。

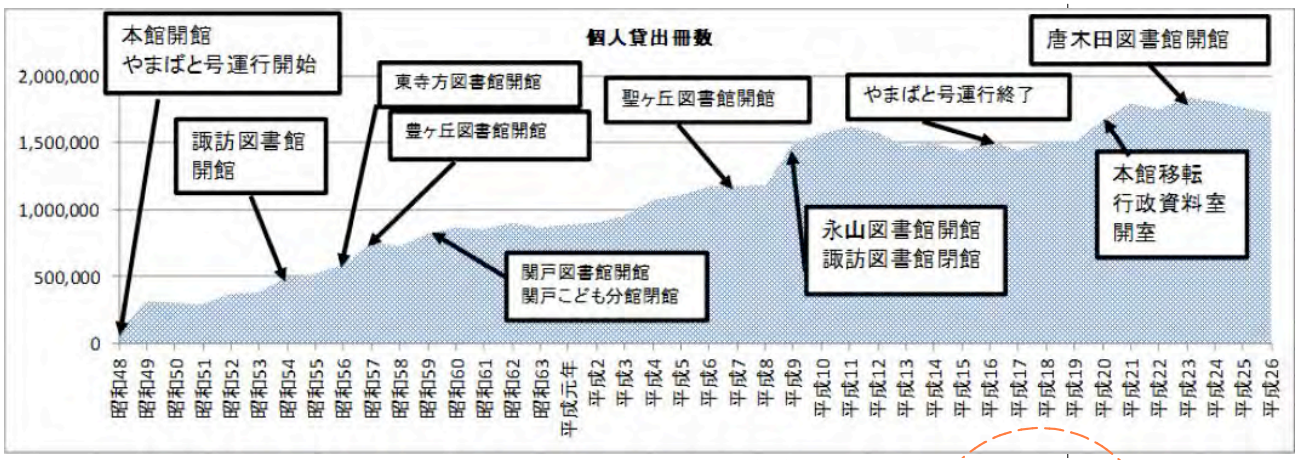
※分散型から集約型へ
図書館が向かうとある。

1－2. 多摩市の図書館サービスの現状

（1） 多摩市立図書館の成長とサービスシステム

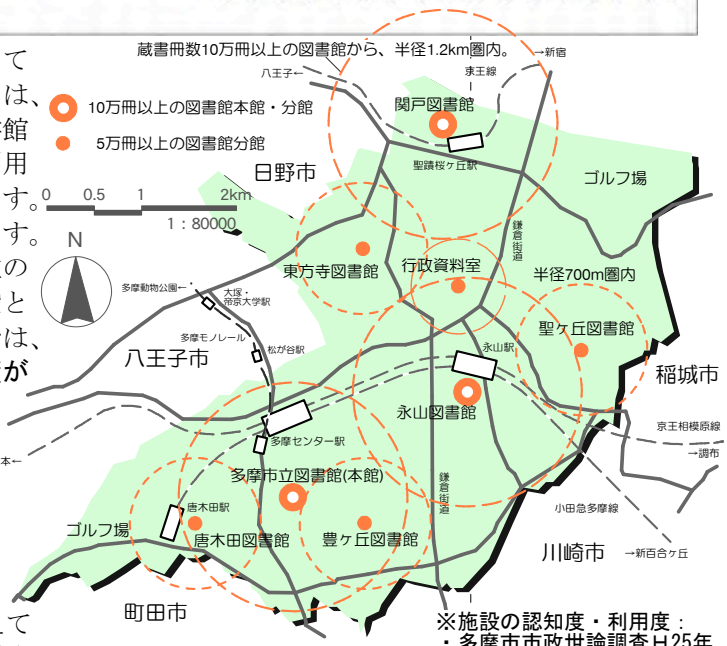
・昭和48年開館から43年を経た多摩市立図書館は、年間に68万人市民の173万冊貸出と47万件リクエストに応える図書館サービスシステムに成長しました。これは全国同規模自治体中で、個人貸出冊数が第二位、予約受付件数が第一位の利用実績です。

※下表の出典：読書活動振興計画　H28年5月
多摩市教育委員会



・全市全域サービスを多摩市立図書館の理念として自動車図書館巡回から始まったサービスシステムは、市内７館１分室の図書館施設群と本市の学校図書館をネットワークし、近隣七市の図書館とも相互利用でつながり、市民の支持を得て成長を続けています。

・市民から見た図書館について各種調査があります。図書館の認知度は二位の89.9%、利用経験は三位の67.9%、年間利用回数で一位、よく利用する施設としても図書館が一位でした。平成26年度の統計では、**人口に対する登録者は41.3%、一年間に貸出実績がある利用者は、人口に対して21.2%**でした。※



（2） 多摩市立図書館を構成する施設群

・多摩市立図書館というサービスシステムを構成する、７館１分室の図書館施設群の環境と活動の概要です。

・この図書館システムの成長にとって課題を抱えている本館の再構築が計画されるとき、下表に総括された資料群と人的なストックをベースに、活動が分析され合理的な再編研究が必要です。併行的に、今後に検討が始まる拠点館と地域館の将来像についても、専門性を堅持しつつ地域の要望に応え充実して、持続性のある方策を全体資源の再編と調整するために、利用者とともに、さらなる研究が必要です。

※施設の認知度・利用度：
・多摩市市政世論調査Ｈ25年
・公共施設の適正配置に関するアンケートＨ24年
・公共施設の見直しについてのアンケートＨ27年より

（下表出典：多摩市の図書館・日本の図書館統計と名簿2015　より）

統計（H26年度）	本館	永山拠点館	関戸拠点館	東寺方地域館	豊ヶ丘地域館	聖ヶ丘地域館	唐木田地域館	行政資料室
床面積 施設型	5,480㎡ S48築/H20移転 旧校舎/単独施設	984㎡ H9築　+共用部等1055㎡ 公民館複合施設	1,045㎡ S59築32年 商業複合施設内	551㎡ S56築35年 福祉複合施設	508㎡ S57築34年 福祉複合施設	557㎡ +共用部等285㎡ H7築21年 公共複合施設	577㎡ H23築5年 公共複合施設	100㎡ H20築8年 市役所庁舎内
資料数 76.3万冊 100%	蔵書34.8万冊 開架11.1万冊 45.6%	開架10.9万冊 14.3%	開架10.1万冊 13.2%	開架4.2万冊 5.5%	開架5.8万冊 7.6%	開架4.9万冊 6.4%	開架4.6万冊 6.0%	開架1.0万冊 1.3%
貸出冊数 172.5万冊 （H26年度）	年間38.9万冊 22.6%	年間48.8万冊 28.3%	年間35.3万冊 20.5%	年間9.2万冊 5.3%	年間16.4万冊 9.5%	年間10.7万冊 6.2%	年間12.7万冊 7.4%	年間0.5万冊 0.3%
貸出人数 67.6万人 リクエスト数 （H26年度）	年間13.5万人 19.9% 年間8.8万件	年間20.8万人 30.7% 年間14.4万件	年間14.8万人 21.8% 年間10.0万件	年間3.3万人 4.8% 年間2.6万件	年間6.2万人 9.1% 年間4.7万件	年間4.1万人 6.1% 年間3.2万件	年間4.9万人 7.2% 年間3.5万件	年間0.25万人 0.4% 年間0.3万件
職員総数 雇用構成 貸出密度	41人 常勤25.嘱託等16. 0.95万冊/年・職員	20人 常勤6.嘱託等14. 2.44万冊/年・職員	17人 常勤6.嘱託等11. 2.08万冊/年・職員	5人 常勤0.嘱託等5. 1.84万冊/年・職員	8人 常勤2.嘱託等6. 2.05万冊/年・職員	6人 常勤2.嘱託等4. 1.78万冊/年・職員	9人 業務委託9. 1.41万冊/年・職員	3人 常勤3. 0.17万冊/年・職員
開館時間 年末年始以外 休館日	月~金:9:30-18:00 土 日:9:30-17:00 第1木曜/祝・休日	月~金:9:30-19:30 土日祝休日:9:30-17:00 毎週木曜	月~金:10:00-19:30 土日祝休日:10:00-17:00 毎週木曜	月~金:10:00-17:00 土 日:10:00-17:00 毎週木曜/祝・休日	月~金:10:00-18:00 土 日:10:00-17:00 毎週木曜/祝・休日	月~金:10:00-18:00 土 日:10:00-17:00 毎週木曜/祝・休日	月~金:10:00-18:00 土 日:10:00-17:00 毎週月曜/祝・休日	月～金:8:30-17:00 毎週土日と 祝・休日休館

（３） 市民の利用の状況と特色

・近年の利用状況では、本館、関戸、永山の３館で全体の約70％を占めています。
・多摩市民は、図書館の規模・役割・特色に応じて、使い分けをしてもいます。
・図書館全体の選書や目録への登録、リクエストや協力貸出のとりまとめなどバックヤード機能を担う「本館」には、企画相談や講座や調べ物や滞在型利用で使います。
・通勤通学や買い物などの便がよい駅前の関戸、永山分館は「駅前拠点館」と呼ばれ資料の多さと夜間や休日開館もあることから、多くの利用者が集中しています。
・子どもや年配者は、歩いてゆける「地域館」を日常的に使っています。蔵書が5万冊程度でその本も返却館に止まるので、リクエストに頼り本を取り寄せる方式です。
・永山は障がい者支援の拠点であり、関戸には活動室があり、いくつかの館で文庫のお話ボランティア活動があります。また、お話コーナーだけでお話室がありません。
・新聞雑誌コーナーはどこも点数が多くなく、くつろぐ居場所が望まれています。
・地域資料や調べ物の要望が多いが本館でも十分でなく、要求の質が高まっています。

（４） 構築された資料群とその表現、管理システムの状況

・図書館システム全体で、蔵書冊数76.3万冊、開架資料52.6万冊、閉架資料23.7万冊。
・館数が多く年間の購入資料費が少ない。複本を購入できないので構成的な資料配架や関係化された魅力的棚づくりや表現が、目標化されていない状況もうかがえます。
・リクエストに応える選書構築や、返却された館に資料が動くシステムで、図書館ならではの構造化された資料世界表現を目指すことが難しい開架室の印象があります。
・開架規模10万冊の本館と２拠点館、５万冊規模地域館の、全体規模に対応した資料の構造化、つながり、奥行きなど、開架室の表現に新味と意図が見え難いようです。
・閉架書庫と団体貸出室は10年暫定利用の本館上階にあるが、荷重や空調が課題です。
・平成18年導入の図書館資料管理システムは、７図書館１室と27学校図書館を結んで、市域全体蔵書の一元管理、所蔵情報と資料利用の共有化ができています。利用者はインターネットで、蔵書検索、予約、利用照会（貸出予約・状況確認）ができます。通信連絡も同システムのメールが活用されて、業務の効率化が進んでいます。

※他市の図書館でも近年その取組みが試行されているが、本館分館ともに、魅力的な開架室づくりが求められている。それぞれの館の収容力や全体の役割分担などの全体再編をふまえた再構築が今後必要になるだろう。

（５） 図書館員の体制

・図書館群全体で職員総数は109人。常勤/再任用/再雇用44人、嘱託56人、委託9人。
・常勤44人（司書有資格23人）：総務係・企画運営係・地域資料係・サービス係
　　・子ども読書支援係・その他　分館を担当。）
・平成7年聖ヶ丘図書館開館時から嘱託職員(全員司書)制度を導入、常勤と嘱託の他、非常勤一般職(年間1500時間を1人日で換算)が窓口など補完的業務を行っています。
・平成22年から東寺方図書館で、平日に嘱託職員が運営する方法を試行しています。
・平成23年唐木田図書館開館から兼務館長は常勤、窓口業務は委託を試行しています。
・職員人件費の抑制と、専門性を維持育成する職員配置の両立が課題です。

（６） 開館時間や力をいれているサービス

・全域サービス体制を維持し開館時間延長や休祝日の拠点館開館など改善しています。
・児童サービスを重視して、子ども読書支援係という担当を置いています。
・障がい者サービスでは、来館困難な利用者に希望図書の宅配サービスをしています。
・京王線沿線七市が18項目の広域連携をして図書館サービスの相互利用をしています。

※平成18年に多摩市子どもの読書活動推進計画を策定。平成24～28年第二次計画の途中。図書館、市民ボランティア、行政窓口、小中学校、と推進している。
その中で、お話会や読み聞かせ活動があると聞きます。

※昭和56年の国際障害者年から障がい者サービスを開始。対面朗読、録音点訳資料の制作、情報機器配備、自宅へ図書の宅配サービス実施。

（７） 学校図書館の状況と公共図書館の後方支援

・全ての小中学校に学校司書が配置され、平成18年から公共図書館システムと学校図書館が連動し、共通書誌化でインターネット検索や予約の資料世界が広がりました。
・公共図書館は、学校連絡会で相互連絡、図書館間の物流支援、調べや朝読資料提供、推薦ブックリスト、専用団体貸出カード、データ登録装備代行、研修会、図書館に小２学級招待、中学生職場体験受入れ、子ども読書まつりなど連携支援しています。
・学校図書館の取組みは早かったが、資料費が少なく地域格差が残る課題もあります。
・多摩市小中学校の生徒児童の図書貸出状況には未だ大きな伸びしろがありそうです。
・他市の取組成果と比べると、児童生徒1人資料費と1人年間貸出数に相関が見えます。
・図書館協議会は、公共図書館からの支援と学校図書館自身の振興を答申しています。学校司書集団の専門性と十分な資料供給など、体制充実への今後の課題も見えます。

※平成22年の図書館協議会の「多摩市における中央図書館機能およびその整備のあり方について(答申）」では、中央図書館は学校教育の資料センターとして連携するべきとあるが課題もある。

１－３. 多摩市の図書館サービスの課題

（１） 現在の「本館」の問題点・・・・（H22.図書館協議会の答申から）

多摩市の中央図書館機能の必要性とその整備のあり方について、図書館協議会は提言をしています。図書館システム全体を俯瞰しつつ以下のように課題総括しています。

※出典：平成22年4月
多摩市立図書館協議会
「多摩市における中央図書館機能およびその整備のあり方について(答申）」
２，５，より

○これまでの経緯と進捗について：

これまで中央図書館の必要性については市民の要望が強く、平成２年度に「仮称多摩市立中央図書館基礎調査」、平成３年度に「多摩市における中央図書館建設に向けての構想案」、平成10年多摩市図書館協議会答申「多摩市立図書館の施設整備及び図書館サービスの在り方について」からも12年経過した。それにもかかわらず実現しなかったことは誠に残念。（中略）市の未来を展望して決断の時がきている。

○現在の「本館」の問題点、中央図書館設置が急務な理由。

現在、多摩市の中心館である図書館本館は、学校跡地を10年間の暫定施設として最小限の改修をしたのみであり中央図書館と呼ぶには様々な問題があります。以下要約。

・市民誰もが使える施設でなければならないが、坂の上、バス停から遠い、階段や坂を上がる必要があるなど障がい者、高齢者、幼い子ども連れで利用するのが難しい。
・駅から坂の上の敷地まで徒歩15分あり、車で来館する場合も駐車場が狭すぎる。
・延床面積は広いが、元教室の耐荷重のため書架を分散配置していて移動距離が長い。
・EVが建物の端の位置にあり、障がい者や高齢者は2階の閲覧室を利用するのは不便。
・床の耐荷重の問題で蔵書収容力が低く、資料が各館に分散配置され本館利用が不便。
・３．４階利用書庫の元教室は冷暖房(温湿度管理)が無く、貴重な蔵書の劣化がある。

図書館本館入口

（２） 多摩市立図書館の抱える課題・・・・（H28.読書活動振興計画から）

市民の読書活動を支える取り組みと「土台となる図書館の運営」についての副題がついた読書活動振興計画は、８つに課題の総括をしています。

※出典：平成28年5月
多摩市教育委員会による
「多摩市読書活動振興計画」
Ⅱ 課題　より

・第１：多摩市立図書館の抱える課題

①急速に進む高齢化：団塊の世代が後期高齢者の年齢に達する「2025年問題」が言われている。短期間で多くの人口が流入したニュータウンは、国を上回る水準で高齢化が進行すると予測され、年金や医療、介護といった社会保障費の急激な増加にもつながる。安定的な行財政運営における大きな課題と、図書館経常費維持の展望がつながっている。

②暫定活用も含めた施設の老朽化：多摩N.T.の初期入居から40 年以上が経過して、公共施設の老朽化に対し、必要な維持管理と更新にともなう財政負担は重く予測された。平成25年11月「多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム」では図書館本館の移転再整備を、東寺方、豊ヶ丘、聖ヶ丘、唐木田図書館の廃止をという方針を一度提示した。平成28年「市民要望を受けて当面存続し検討」。市民と行政で今後の在り方研究を予定。

③資料費の確保と人件費：図書館費は約63,709万円(平成26年度)で内訳は資料費8%、運営経費18%、職員経費が74%（唐木田図書館窓口業務委託費の約３千万円を合わせて、職員経費79%）。資料費は5,049万円、多摩地域の人口10～20万人規模の13市と比較して５位。現状より資料費を増額確保するには、効果的効率的な図書館の運営が必要となる。専門性を持ちつつ職員構成の見直しを進めるなど人件費の構造改革をする必要がある。

④職員の先細り：市民のニーズを踏まえた図書館資料の組織化や図書館経営にあたる職員は、経験と知識が求められる。常勤職員が高齢化し定年を迎えていく中、常勤職員と嘱託職員の役割分担、職員集団としての専門性を維持・確保するための役割に応じた人材育成などのしくみづくりが必要となる。

⑤ICTの活用による新たな情報提供や業務効率化：電子書籍導入、貴重な地域資料のデジタルアーカイブ化など電子媒体の利用環境は十分整備されていない。また図書館システムの更新やインターネットの活用により、図書館利用環境の改善や業務の効率化を図ることは、サービスの改善や職員の働き方の課題解決にも関連する重要分野となる。

※ICT：情報通信技術。
コンピューターやインターネットなどを活用したコミュニケーションの技術。

⑥書庫：書庫については、これまで学校跡地などに分散していたものを本館に集めることができたが、床の荷重の問題や空調など、持続可能な環境とはいえない。

⑦蔵書の適正管理：図書の亡失は以前からの課題であり、拠点館２館には不正持出し防止装置を設置し効果が見られる。しかし本館では書架の見通しの悪さもあり、亡失対策は大きな課題となる。近年、ICタグを用いて自動貸出と組み合わせた取り組み例もある。また、水濡れは本の大敵であり、書き込みや汚損の事例もある。次の利用者のために、返却時に１冊１冊点検をしているが、負担の大きい作業となっている。

⑧図書館の運営に対する指摘：唐木田図書館の窓口業務委託の状況から、市は教育委員会に対し、図書館の機能、運営方法等全般について抜本的な見直しが必要との見解を示し、今後の図書館運営についての考え方を示すよう求めた。また、多摩市議会は、平成23年度決算における事務事業評価において、現状維持による図書館行政の発展向上が考えにくいことや施設総量見直しの視点から、全図書館で同一均質のサービスを提供する必要性についても検討を要すること、『目指すべき図書館像』を明らかにし具体的な処方箋を描くべきこと、財源のみでなく人的資源も先細りの現実を直視し、公立図書館の質向上につながる最適サイズを考えるべきことなどの評価を行った。

（３） 多摩市立図書館の現在の蔵書の特徴とその課題

全国的にも高い貸出実績と予約件数を維持してきた多摩市立図書館ではあるが、全市図書館に資料が分配配架される方式が、成長深化の壁である状況が想像できる。

多摩市立図書館の蔵書を、カーリルというデータアプリを用いて、優秀な先進館である浦安と調布の図書館の蔵書構成と比較した調査研究を引用して述べてみたい。

※大妻女子大学松本研究室がカーリルを使って、多摩市立図書館の蔵書を、浦安市や調布市と比較分析しています。

※カーリル：国内の6000図書館の蔵書検索が可能なサービス。

○多摩市の図書館は資料費の厳しさに比べて多様な図書を購入しているが、それらは地域館拠点館に分散的に所蔵され、利用者は一図書館でアクセスできていない。
○多摩市の図書館は複本購入を抑制し、多くのタイトル数を購入する傾向があるが、他市に比べ予約件数が多い背景には、ひとつの図書館でのアクセス困難がある。

①多摩市民がアクセスできる図書のタイトル数は比較的に多い。(カバー率15.9%)
（2015.多摩市資料費4490万円.1685件、浦安市8549万円.2334件22.1%、調布市6700万円.1978件.18.7%）

②最多の永山図書館でも出版物の4.7%のタイトル数にしかアクセスできていない。
（カバー率　永山495件4.7%、本館418件4.0%、関戸401件3.8%、
唐木田233件2.2%、豊ヶ丘222件2.1%、聖ヶ丘166件1.6%、東寺方156件1.5%）

③多摩市では本館より永山図書館の方が多くの本にアクセスできるが 4.7%と低い。
（2015年度　多摩永山495件 4.7%、浦安市立中央館 2061件 19.5%、調布市中央館 1807件.17.1%）

④最大の永山図書館でのアクセスできる全市比率は30%：(相対中央館アクセス率)
（2015年度　多摩本館418件24.8%、多摩永山495件29.4%、浦安市立中央館 2061件 88.3%、調布市1807件.91.3%）

⑤多摩市は複本が少なく市蔵書全体のタイトル数を重視している：(平均複本冊数)
（複本冊数　多摩市 1.269冊、浦安市 1.777冊、調布市 1.868冊、）
浦安市調布市は中央図書館で自治体で購入する図書のほとんどを入れ、分館は複本を購入している。）

⑥多摩市は浦安市や調布市より予約リクエストが多い。(ひとつの図書館での充足)
（リクエスト数　多摩市 475.7千件 100%、浦安市 435.2千件 91.5%、調布市 208.0千件 43.7%）

※多摩市立図書館の選書は、浦安市や調布市と比較して異なる特色・傾向にありそうだ。：(一致率)
（浦安を100%としたときの選書一致度　多摩市 55.5%、調布市 76.0%、）

①国立国会図書館の2015年の書誌162,283件から1/10のサンプルをとりISBNがついている10,570件を、各館について所蔵調査。

③相対中央館アクセス率：市内の図書のうち中央館でアクセスできるものの比率。集中性特化性評価。

④予約件数が多くなる背景と考えられる。

⑤平均複本冊数：複本購入の程度（分館運営方針）。所蔵総冊数÷タイトル数

これらの状態（多様な資料に一箇所でアクセスできない）の改善が、多摩市立図書館の重要な課題であり、中央図書館整備の必要性と意義がここにあります。

（４） 図書館の課題に対するその他の市民意見の洗い出し

本構想では、図書館の課題を専門の眼で整理している左の二つの資料に加えて、
・平成19年.多摩市民まちづくり討議会報告書：第１章討議の結果と市民からの提案
・平成23年.多摩市立図書館の基本方針・運営方針：市民アンケートのご意見
・平成28年.公共施設の見直し方針と行動プログラム更新案：パブリックコメント
から、市民利用者のご意見を洗い出しています。

基本構想の策定委員会と併行して、図書館に関わる市民グループや学校や行政のヒアリングを重ねて記録に留め、策定委員会での議論の材料にしてきました。これらの多様な方法で時間をかけて集められた図書館の課題に関わるご意見を、１７の要素ごとのカードに分類と縦軸横軸の関係づけをして、マトリックス状に一覧表に並べたものが、次のページの「現況と課題の総覧チャート」です。

※チャート：図表のこと。航海に必要な海図など位置関係を示しつつ、全体像を俯瞰するベースマップともなる。

１−３. 多摩市の図書館サービスの課題

（５） 多摩市立図書館の全体像を説明する課題総覧チャート

現況と課題	資料世界 ＜本・情報＞	図書館員 ＜人・組織＞
分館 ＜地域館＞ ・東寺方 ・豊ヶ丘 ・聖ヶ丘 ・唐木田	**カルタ01/本・地域館** ・図書館蔵書規模は約4.2〜5.8万冊、全て開架。 ▲全集ものの全巻が揃って棚にない。 ▲３万〜５万冊分館の生活に対応した蔵書構成に徹底されず、ﾘｸｴｽﾄ返却の結果の資料世界。 ▲近年、地域館の資料購入図書が減っていて、利用者は永山図書館利用に傾斜している。 ▲新聞のタイトル数は６。雑誌は６０。 ＜今後の地域館への要望＞ ◎健康情報、乳幼児の絵本など資料に期待。 ◎行政ブランチとしての資料収集に期待。 ◎新聞雑誌などの充実への期待。	**カルタ02/人・地域館** ・図書館職員規模は５人〜８人（唐木田9人） （常勤０〜２人、嘱託等5〜6人、唐木田委託9人） （職員1人年間貸出1.8〜2万冊、唐木田1.4万冊） ▲唐木田は窓口業務委託、館長は正職を配置。 ＜今後の地域館への要望＞ ◎それぞれの地域館に相応しい資料構築への期待。 ◎必要な資料が手に取れるよう、地域館の職員が地域館の蔵書構成に責任を持つ体制が欲しい。 ◎小さい蔵書規模の分館の配架構成方針が必要。 ◎地域館にこそ専門性のある司書配置を。
分館 ＜拠点館＞ ・関戸 ・永山	**カルタ05/本・拠点館** ・図書館蔵書規模は約10万冊、全て開架。 ・新聞のタイトル数は関戸１４永山１８、雑誌のタイトル数は関戸約100永山約150。 ▲全集ものの全巻が揃って棚にない。 ▲開架室の成長の方向性、５年後の展望は。	**カルタ06/人・拠点館** ・図書館職員規模は１７人〜２０人 （常勤６人、嘱託等11〜14人の構成） （職員一人年間貸出2.1万冊〜2.4万冊） ・障がい者サービスは、職員全員の交代制で対応されている。 ・点字資料の作成は、市民グループ作業による。
図書館 ＜本館＞ ・現本館 ・専門的直接サービス ・資料群構築センター ・アウトリーチサービス	**カルタ09/本・現本館** ・図書館蔵書規模は約34.8万冊。開架11万冊。 ▲新聞のタイトル数は９，拠点館より少ない。 ▲雑誌のタイトル数は100未満、拠点館以下。 ▲視聴覚資料は近年購入していない。 ▲専門書のﾘｸｴｽﾄには近隣市相互貸借で対応。 ▲全集ものの全巻が揃って棚にない。 ▲群書類従など基本図書が分散して本館に無い。 ＜今後の中央館への要望＞ ◎世界を体感できる豊かで深みあるコレクションを ◎資料収集方針をしっかり作ってほしい。 ◎土日閉館の行政資料が収蔵された中央館を。 ◎そこに行けば何でも調べられる図書館がよい。 ◎点訳音訳/電子資料/有料データベースを。 ◎安全な資料の保管体制を。（調温度、調湿、防火）	**カルタ10/人・現本館** ・図書館職員規模は４１人（常勤25人､嘱託等16人） （職員一人年間貸出0.96万冊） ＜今後の中央館への要望＞ ◎本館を中央館にして、課題解決型のサービスを。 ◎役立つことに気づく中央館の運営を。 ◎急激に進む高齢化に対応したサービス、高齢者に快適安心な施設の計画を。 ◎中央館が分館を充実させるよう支援するｼｽﾃﾑを。 ◎職員組織が充実成長する合理的な職員体制を。 ◎図書館の長期ビジョン・全域奉仕を考える力。 ◎専門職が誇りをもって専門スキルを育めるように。
全域奉仕 図書館ｼｽﾃﾑ ＜ﾈｯﾄﾜｰｸ＞ ・行政資料室 ・幼稚園保育園 ・(学校図書館支援) ・病院/老健施設 /包括支援施設	**カルタ13/本・ネットワーク** ・渡邊茂男氏寄贈の「へなそうるのへや」新設。 ・障害者ｻｰﾋﾞｽで資料の作成やﾃﾞｰﾀﾍﾞｰｽ共用進む。 ▲経年統計は、蔵書冊数は微減、資料購入費横ばい。 ▲図書に所在記号がなく返却館に置かれるシステム。 ▲関係付けた棚構成や棚表現が目指されていない。 ▲奉仕人口や館数に対する複本購入が無い。または出来ない。ベストセラー要望には20冊程度対応。 ▲複本が無く所在が不定でリクエストと物流が多い。 ▲文化財など多摩市の行政資料の表現が不十分。 ＜今後の図書館への要望＞ ◎レファレンス機能や働き盛り世代への情報強化を。 ◎学校図書館の資料数や資料費は、文科省の基準を。 ◎中央館が分館を充実させるように支援するｼｽﾃﾑを。 ◎収書方針は分野分類に沿いﾚﾍﾞﾙを決めて行いたい。	**カルタ14/人・ネットワーク** ・図書館職員規模は１０９人（正職４４人） （職員一人年間貸出1.59万冊） ＜今後の図書館への要望＞ ◎働き盛り世代に需要のある専門的資料の収集を。 ◎地域館に不十分な行政資料の収集と充実を。 ◎中央館が分館を充実させるように支援するｼｽﾃﾑを。 ◎将来に外部委託化がされないよう計画的な有資格正規職員の採用と配置を。 ・学校図書館へは2回/日、調べ学習貸出の対応。 ◎学校図書館や学校司書の相談連携の図書館窓口を。 ◎学校と公共の司書の交流勤務研修や配置交換研究。 ◎学校図書館の資料支援相談､学校間連携､職員研修､など、公共図書館や図書館協議会との関係強化を。 ◎図書館協議会の活性化と削減された定数の復活を。（公募委員を増やして欲しい。）
	資料世界 ＜世界表現性・地域性＞	図書館員 ＜専門性＞

この度の基本構想で、既往資料やヒアリングから集められた図書館の現況と課題への意見です。

・現在の状況、▲現在の課題、◎変化を希望

図書館施設 ＜場・環境＞

カルタ03/場・地域館

・図書館床面積規模は約500㎡～。
（東寺方551.豊ヶ丘508.聖ヶ丘842.唐木田577㎡）
・地域に身近な図書館の魅力。児童生徒の居場所。
・唐木田の喫茶コーナー、展示は人気がある。
・お話室は無いがしかたない、お話コーナーはある。

▲唐木田、聖ヶ丘以外の複合施設には老朽化の課題。
▲高齢者や子どもには良いが働き盛りの利用に不足。
▲研修集会、展示の機能が無い。
▲包括支援ｾﾝﾀｰ設置のために現図書館割愛に反対。
▲現状の事務/裏方スペースは狭く、機能的でない。
▲ティーンズ世代は忙しく図書館利用から離れる。

◎地域コミュニティのひろばに。展示交流機能を
◎開館時間の弾力化を

カルタ07/場・拠点館

・図書館床面積規模は約1000㎡。
（関戸1045、永山984㎡）
・永山の喫茶コーナーは人気がある。
・地域に近い図書館の魅力。児童生徒の居場所。
・関戸の研修室は人気。
・永山は医療機関に近く、障害者支援活動の拠点。
・市民の展示交流機能を。

▲お話室（コーナーはある）、展示の機能が無い。
▲永山は、資料スペース座席数ともに満杯状態。
今後の成長の方向性をどうイメージするか。

▲現状の事務/裏方スペースは狭く、機能的でない。

カルタ11/場・現本館

・10年間暫定施設として閉校の中学校を改修整備。
・図書館床面積規模は約5480㎡を使用。
（開架室860.閲覧室135.学習室102.事務室272）
・２階学習室でパソコンが使えるのがよい。
▲空調不十分だが、学習室、閲覧室などゆったり。
▲駐車場規模、書庫や開架室床の耐荷重の不足。
◎本館に無い新中央館機能を（まち討議会意見）
居心地のいい空間/集うことの価値/書庫機能/学習支援/相互学習拠点/資料充実/他施設連携。
静粛閲覧席増とサロンの分離/ICT個人ブース/AV視聴環境/ｸﾞﾙｰﾌﾟ活動室/駐車駐輪場の充実/ﾊﾞﾘｱﾌﾘｰ化/障害者奉仕/BM復活/予約本受取拠点/サロン空間/IT情報発信/多世代交流/保育環境/
◎自由に集まり、充実したIT環境の中央館を。

カルタ15/場・ネットワーク

▲学校図書館を公共図書館の地域サービス拠点にするアイデアは、安全と授業ｶﾘｷｭﾗﾑで困難。
▲学校図書館に新鮮な資料の充実をさせつつ、環境の魅力化への取り組みが、進んでいない。
▲行政資料室は市役所第二庁舎に位置しているが、市の職員や議員の利用は盛んではない。
（利用活性化のためのどんな取り組みがあるか）
▲行政資料室には以前、郷土資料が配架されていたが、蔵書構成の見直しで本館に集約された。
▲資料室資料の副本が本館に常備されていない。
（以前郷土資料展示が行政資料コーナーにあった）

市民利用者 ＜活動＞

カルタ04/活動・地域館

・貸出冊数規模は9.2万冊～16.4万冊
・利用者数はH12→H26で増減に格差あり。
（東寺方132%.豊ヶ丘52%.聖ヶ丘72%.合計18.4万人）
・全ての地域館分館の貸出利用数は全体の３０%。
・豊ヶ丘は本館開設後の利用は半減したが依然多い。
・職員のお話会、ボランティアのお話会が人気。
・児童館や老人福祉館との連携ができる。

◎高齢者や児童サービスを更に手厚くする必要。
◎児童生徒が徒歩で使える地域館と学校の連携を。

◎行動ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑの更新で、存続となった地域館の将来像や再整備を、いつどう住民利用者と一緒に精査や検討をするのか予定を示して欲しい。

カルタ08/活動・拠点館

・貸出冊数規模は35.3万冊～48.8万冊
・利用者数はH12→H26で増減に格差あり。
（関戸116%.永山87%.合計35.5万人）

＜今後の拠点館への要望＞
◎中央館整備後の、永山図書館と関戸図書館の将来像を構想し、再構成と魅力化策を考える。

カルタ12/活動・現本館

・本館の貸出冊数規模は永山に次いで38.9万冊。
・利用者数はH12→H26で3倍増。（273%.13.5万人）
・赤ちゃん向けお話会など企画が人気有り。

▲暫定利用施設のため、駅から徒歩15分、坂の上。
▲バス停から遠く多様な利用者にアクセスが悪い。
▲弱者の車利用にも十分な駐車場が無い。
▲校舎利用のため荷重分散で利用動線が長い。
▲荷重制限で資料は分館に分散配置されて不便。
▲3.4.階の書庫は冷暖房が無く、保存に適さない。
以上から早急な中央館整備の必要性が、図書館協議会から答申されている。
▲駅前の永山拠点館より貸出利用が少ない。

カルタ16/活動・ネットワーク

○多摩市第五次総合計画/基本計画｛施策の成果目標｝では、H26年度市民一人当年間貸出11.7冊を達成。
○人口はH12→H26で、14.1万→14.8万人の微増。
○登録者数・利用登録率41%（６万人）は好成績。
（人口10～15万人都市中で貸出密度２位、予約１位）
実利用者21%（3,1万人）、のべ貸出利用67.6万人。
▲だが、利用者総数は14年間で減少傾向にある。
・年齢別では40代～70代。6歳から14歳が多い。
▲5歳以下、15歳～20代の貸出利用が低調である。
▲学校図書館は、全校に司書が配置され、公共図書館との連携など形が整いつつあるが、年間資料費が少なく、生徒児童の貸出密度が延びていない。
◎経年統計や他市統計から検証や研究が必要だろう。
◎ｺﾝﾊﾟｸﾄｼﾃｨの根幹、新中央館への交通ｱｸｾｽの整備を。

ﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄ ＜運営＞

カルタ17/運営・経営

▲唐木田図書館委託（6年）についての行政効果検証ができていない。
◎休館日が増えても、新刊入荷が遅れても既にある良書がきちんとある地域館の存続をしてほしい。

＜今後の拠点館への要望＞
◎永山図書館に夜間受け取り機能を。
◎中央館が出来ても、障がい者奉仕の機能を全て移転しないで欲しい。

＜今後の本館ﾏﾈｰｼﾞﾒﾝﾄへの展望＞
◎現状職員体制の行政効率の評価から、適正再配置の研究を行い、建設準備室の人員確保研究が必要。
◎中央館計画について配置可能人員と開館時間計画の条件研究が必要。
◎全域図書館奉仕の主体的運営を、常勤職員再編で行う研究が必要。

・図書館の基本方針・運営方針を持つ。
・読書活動振興計画（H28）を策定した。
・公共施設の見直し方針と行動ﾌﾟﾛｸﾞﾗﾑ更新で今後の改変の方向が示される。
・多摩市教育振興ﾌﾟﾗﾝで学校図書館の施策が進んだ。

▲H12→H26の経年統計で図書館費は、
7.16→6.37億円。
人件費委託費は、
4.59→5.03億円。
資料購入費は、
9300→5050万円。
職員数は、
87人（常勤45）→99人（38）
▲人件費比率の高さ、若い専門職員の配置が難しいことが課題となる。正規職員組織の専門性の継続が課題。
◎どこの館でも正規職員配置があり、同じサービスが直営で受けられるよう地域館利用者の期待あり。

図書館施設 ＜ひろば性＞

市民利用者 ＜市民性＞

ﾌﾚｷｼﾋﾞﾘﾃｨ & ｻｽﾃｨﾅﾋﾞﾘﾃｨ ＜持続性＞

１−４. 多摩市の図書館政策研究の経緯

（１） これまで２６年間にわたる多摩市の図書館政策研究

中央図書館やあらたな展開への期待と、公共施設の総量見直しへの対応の間で、多摩市の図書館政策の研究と市民への方針提示が、以下のように蓄積されました。これらには市民参画があり、市民独自の研究活動と発表も残されています。

●平成２年１２月：　（図書館計画施設研究所）
『多摩市立中央図書館基礎調査 報告書』
１多摩市の図書館サービスのあらまし
２市民は図書館をどのように利用しているか
３図書館に貸出登録をしていない市民に聞く
４多摩市の図書館サービスの課題とサービス目標
５中央図書館に求められるもの（開架資料36万冊）

●平成３年３月：
『第三次多摩市総合計画 基本計画』
・図書館ネットワークの整備
・中央図書館の建設
・地区図書館の建設

●平成４年１月：　（多摩市立図書館）
『多摩市における中央図書館建設に向けての構想案 ２１世紀への図書館計画』
１ これからの図書館
２ 中央図書館の役割・機能
３ 中央図書館のサービス
４ 中央図書館の資料（開架40万冊、閉架60万冊）
５ 建築計画（ワンフロア4,500㎡）
６ 管理運営

●平成８年３月：
『第三次多摩市総合計画 ２１世紀に向かう新たなまちづくり』
・図書館ネットワークの整備
・中央図書館の建設
・地区図書館の建設

●平成１０年４月：　（多摩市図書館協議会）
『多摩市立中央図書館の施設整備及び図書館サービスのあり方について（答申）』
１ 中央図書館の必要性
２ 役割と機能
３ 中央図書館のサービス
４ 施設・設備・規模（面積10,000 ㎡以上、蔵書32万冊、書庫100万冊）
５ ふさわしい場所
６ 建築

●平成１３年３月：
『第四次多摩市総合計画 基本計画』
・図書館ネットワークの充実
・地域図書館の整備
・中央図書館機能の整備

●平成１９年１２月：　（多摩市まちづくり討議会実行委員会）
『多摩市まちづくり討議会報告書』
１ 今の図書館何が足りない？
２ どんなものを取り揃えましょう
３ こんな工夫で利用度アップ
４ 多摩市に中央図書館は必要？
５ 市民が求める多摩市の図書館・図書館サービス
（１）運営方法（２）施設・設備（３）開館日時（４）新たなサービス要望

●平成２２年４月：　（多摩市図書館協議会）
『多摩市における中央図書館機能およびその整備のあり方について（答申）』
１ 文化都市にふさわしい「本の館」を（総論）
２ 現在の「本館」の問題点
３ 中央館はどこに
４ 役割とサービス《100 万冊規模の蔵書》

●平成２３年４月：　（多摩市立図書館）
『多摩市立図書館の基本方針・運営方針について』
１ 基本方針と運営方針、市民アンケートの概要と図書館の考え方
２ 現在の「本館」の問題点

●平成２４年２月：　（多摩市教育委員会）
『第二次多摩市子どもの読書活動推進計画』

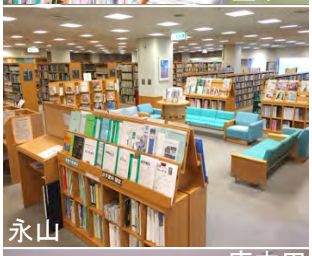
●平成２５年８月：　（多摩市図書館協議会）
『多摩市立図書館の施設とサービスのあり方について（意見）』
※行動プログラムの協議への回答についての意見
１ 施設のあり方について（開架30 万冊、閉架50 万冊、１ 万㎡規模）
２ サービスのあり方について
３ 運営のあり方について

●平成２５年１１月：　（多摩市）
『多摩市公共施設の見直し方針と行動プログラム』
・４地域館の廃止と３館化構想

●平成２８年５月：　（多摩市教育委員会）
『多摩市読書活動振興計画』

●平成２８年７月：　（多摩市）
『多摩市公共施設の見直しと将来像』行動プログラム更新
・４地域館を当面存続し検討することと、本館再構築の方針
同秋　・パブリックコメントの総括

※出典：平成28年5月 多摩市教育委員会による「多摩市読書活動振興計画」巻末資料２を総括し加筆して作成しています。



７館１室の多摩市の図書館

第二章　多摩市民のめざす図書館

この章は、多摩市全体の図書館サービスのしくみ（図書館システム）の将来像、また、全市まちづくりとの関係を提言しています。

2-1.「知の地域創造」のための図書館
（基本方針と５つの運営方針）
2-2. 図書館システムとしての多摩市立図書館
2-3. 再生まちづくりの担い手となる図書館
2-4. あたらしい多摩市立図書館全体への提言
（提言チャート）

※各頁の文章を補完する挿入写真は、活動のイメージをお伝えするための各地の図書館の風景です。

２－１　「知の地域創造」のための図書館

（１）「知の地域創造」のための図書館

序章で触れた「『知の地域創造』センター」。多摩市の従来の図書館本館の概念ではくくれないもの、文化・芸術・公園・劇場・音楽堂など、多摩中央公園を中心とした多摩センターにおける文化的なエリアのイメージとして、策定委員会の中で話されました。その策定委員会が始まる直前に、公益財団法人文字・活字文化推進機構主催のシンポジウムが多摩市内で開催され、「知の地域づくり」における図書館の役割などについて議論が交わされました。その中で出てきた様々な提言やイメージは、この基本構想にも方向性を与えるものになっています。

※出典：平成28年6月18日
全国リレーシンポジウム
「知の地域づくりを考える in多摩市」がありました。
片山前総務大臣、姜尚中、柳田邦男、阿部裕行市長、が、あるべき図書館像を語りました。片山鳥取県知事時代の図書館施策を元に「知の地域づくり」が議論のテーマでした。

○多摩市の４５年の歴史を振り返り「知の地域づくり」を市民と考えてゆきたい。
○アニメ「耳をすませば」の舞台だからか、多摩エリアは図書館が息づいている。
○多摩市では、コミュニティの核として、図書館が重要な役割をはたしてきた。
○この街では高度経済成長時代に、文庫活動、読書活動、読み聞かせに力を発揮してきた地域のお母さんたちが沢山いた、ということが、蓄積としてある。
○「知の地域づくりin多摩」シンポジウムでうかがったことも踏まえて、図書館については、直営を基本とすべきだと思う。そして文化を大切にしてゆきたい。
○地域の文化に関するコーナー、行政資料のコーナー、多摩ではそのような資料を重視してきた。
○図書館は、ある意味子どもたちの居場所だけでなく、広場だと思うし、知識の知縁と地域の地縁をつなぐ拠点であると思う。そのなかで働く、あるいは生活する、そして育っていくみなさんにとって幸せな知の拠点を、市民のみなさんとつくっていかなければと感じている。
○クールジャパンである漫画・アニメも含め大きく広い意味で活字文化ととらえ、これからつくる図書館は、年配の方だけでなく若い人の居場所でもあり、情報をあらゆる面で発信できる図書館にしたい。

※シンポジウムでは、阿部多摩市長が左記のように知の地域づくりと図書館について発言しています。

※「知の地域づくりを考える in多摩市」では、柳田邦男基本構想策定委員会委員長が他市の事例を挙げました。
・一緒に親子で読書の家読。
・独立絵本館と食育料理教室。
・テラスで緑陰読書。
・まちかどブックコーナー。
・市民の環境緑化ボランティア
・学校図書館に資料費100万円
・指定管理者制度の事例顛末。
・地域文化に関するコーナー。

これまでの多摩市立図書館は、紙媒体としての本を貸し出すという機能が中心でした。最近の新しい図書館の事例を見ると、資料面ではマルチメディア、ゲームから「もの」実物展示まで、機能の面ではビジネス支援などの課題解決や作業の場、居場所や交流の場の提供など、本来「図書館」というものは「世界の知識にアクセスできる機能」を基本として、時代の要求に応じてフレキシブルに変わっていく可能性を持っています。

この章では、市の方針や図書館の基本方針などを押さえながら、市民の意見を踏まえた策定委員会の提言をもとに、これからの多摩市立図書館のサービスネットワーク全体のありかたについてまとめていきます。

あなたのための緑陰の読書席

（２）＜基本方針：市民の「知る」を支援する。＞というのは、

平成２３年、多摩市立図書館は、市民の声をアンケートで広く聴いて、図書館の基本方針・運営方針を確定しました。基本方針は、このように記されています。

※出典：平成23年4月
多摩市立図書館
「多摩市図書館の基本方針・運営方針について」より

＜基本方針＞　市民の「知る」を支援する

多摩市立図書館は、持続可能な社会を目指し、すべての市民が必要とする資料や情報を得ることを支援します。そして、いつでも、どこでも、だれでも気軽に利用できる図書館サービスの実現のため、地域や他機関と協力し、市民のみなさんと一緒に、積極的な図書館活動を推進します。

現在も進行中のこの理念は、多摩市が「知の地域づくり」を目指す方針と重なるところであり、地域づくりの市民と行政のほかの施策とも、連携や協働をしてゆくことを目指してゆきます。

この基本方針の「知る」ということに関連する市の基本理念に、多摩市自治基本条例があります。この中では、第４条（基本原則）第１７条（情報共有）が「知の地域づくり」につながります。

※出典：多摩市自治基本条例
（基本原則）
第４条 私たちのまちの自治は、市民の意思に基づき、次の各号に掲げる基本原則によって推進されなければなりません。
（情報共有）
第17条 市議会及び市の執行機関は、保有する情報が、市民共有の財産であることから、これを市民にとってわかりやすいものにしなければなりません。
２ 市議会及び市の執行機関は、市民の参画及び協働にあたって、情報が共有されるよう、必要な措置を講じなければなりません。

（３）＜５つの運営方針＞というのは、

○図書館の基本方針を具体化する施策として「５つの運営方針」を掲げています。
○第五次多摩市総合計画基本構想は　「みんなが笑顔　いのち　にぎわうまち　多摩」をおおきく掲げています。そこでは、
１、市民主権による新しい地域社会の創造
２、豊かなまちを次代へ継承
３、自立的な都市経営
が説明されていますが、「知の地域づくり」も５つの「図書館の運営方針」も、これにつながる理念・政策と考えています。

まちづくり、復興のためにはたらく図書館

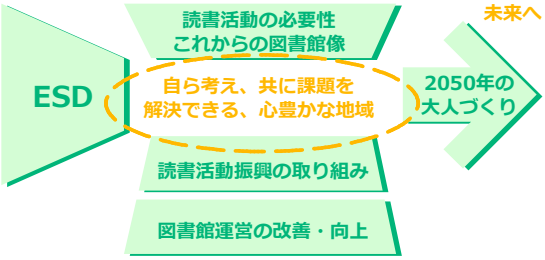
①「だれもが使える図書館」を目指します。

本館を中心にして分館及び分室を運営することにより、**身近なところ**で気軽に利用できる図書館を目指します。
また、だれもが図書館を利用できるよう、**高齢者や障がい者、多様な文化を持つ人々へのサービス**に努めます。

畳の読書席、縁側に腰掛ける年配のご婦人

②「子どもの読書環境の整備」を目指します。

一人ひとりの子どもが、**感性や人間性を育み**、大きく**変化する社会情勢にも対応**できるよう、**生きる力を支援**する図書館を目指します。
また、子どもたちが読書に関心をもち、いつでも読みたいときに興味ある本に出会えるよう、読書環境の整備に努めます。



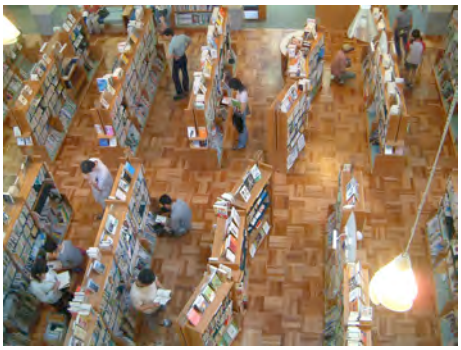
ESD:Education for Sustainable Development

※ESD:**持続発展教育**は、課題を解決する力やコミュニケーション力を育み、持続発展可能な社会の担い手を育成する教育。
多摩市では平成25年に、市内の小中学校が ESDの推進拠点であるユネスコスクールに登録し「2050年の大人づくり」をキャッチフレーズに取り組んでいる。
出典：平成28年5月
多摩市教育委員会
「多摩市読書活動振興計画」

保育園児たちの早朝利用、ピアノがある開架室

③「市民や地域に役立つ図書館」を目指します。

暮らしや地域の**課題解決**、**豊かな読書**を支える情報拠点として、多様な資料や情報を収集・提供し、市民や地域に役立つ図書館を目指します。
また、多摩市と多摩市に関係する地域資料の活用をつうじて、**地域文化の継承と新たな創造**を　支えます。


それぞれの「本と市民の出会い」がある開架室

④「しらべるを支え、つながる図書館」を目指します。

図書館資料は、身近なところで多くの人が便利に利用できるよう、全館で共有管理しているメリットをさらに活かします。
また、より高度で専門的な調査研究に関する要望に応えるため、**レファレンスサービスの充実**を図るとともに、**他の図書館、大学、専門機関との連携**を推進します。

こころ強い司書さんがいるレファレンスデスク

⑤「弾力的な管理・運営」を目指します。

利用者サービスのより一層の向上のため、**新しい技術**や他の図書館及び**異業種の発想や手法**を　積極的に学び活用することにより、**弾力的かつ効果的な管理・運営**に努めます。

2－2. 図書館システムとしての多摩市立図書館

（1）図書館システムとしての多摩市立図書館

中央図書館、駅前拠点図書館、地域図書館、学校図書館、アウトリーチサービスの拠点をつなぐ、全市をおおう図書館サービスのネットワーク（システム）の総体を、多摩市立図書館と考えます。図書館システム全体で「知の地域創造」を支えます。

この図書館システムとういのは「成長する有機体」であると言われています。その成長を支える３要素は、人・組織、本・情報、場・環境、であって、有機体の盛衰は、成長の栄養分を送る図書館政策のありようにかかっています。

有機的な運動体・組織には、全体を関連づけ統括する中枢機能も必要です。多摩市立図書館の近年の停滞の課題は、中央館の不在といわれてきた理由です。高い専門性と中枢管理機能を備えた中央図書館は、サービスと資料の奥行きと広がりをつくり出し、市域全体に対応する拠点館・地域館を改善し魅力的にしてゆきます。これは、研究と先進国先進市での実例で証明されてきたことです。

地域館や拠点館は「かかりつけ医」であり、中央館は「専門病院」「総合病院」に例えられます。市民はそれぞれの状況と必要性に合わせて、使い分けができるようになる、それが図書館システムのなかの役割分担です。

※図書館とは、建物のことではないということを、45年の経験の蓄積の中にある多摩市民であれば、誰でもが知っていることなのです。そのことは、多摩市の図書館政策の正しさと先進性を、自己証明しています。

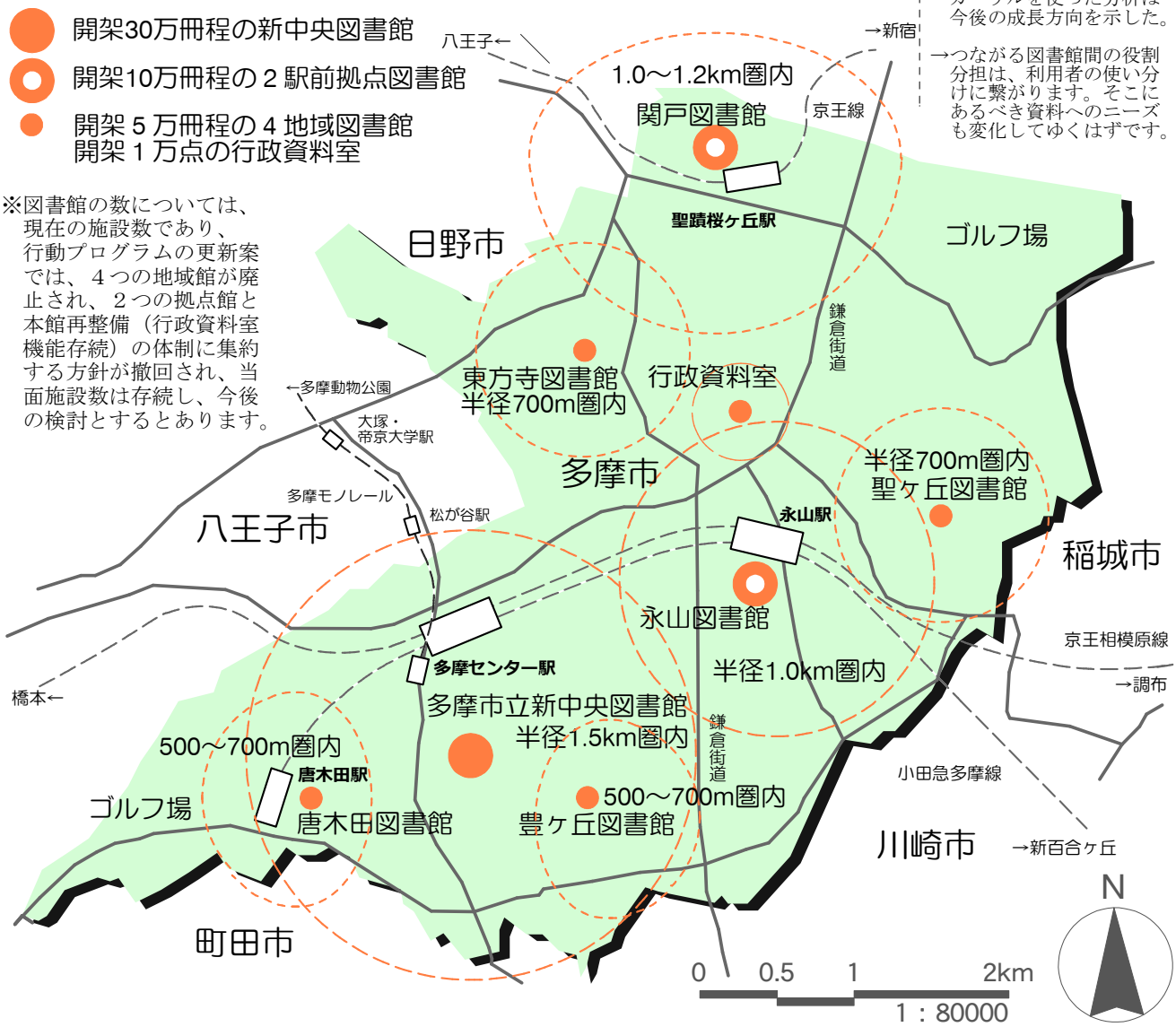
※アウトリーチサービス：かつての図書館は、資料を整えて利用者を迎える「待ち」のサービスでした。図書館に日常的に来館できない個人や団体に対し、館から出掛けて全域に届いてゆくサービス形式。

※「図書館は成長する有機体である。」の出典はインドの図書館学者ランガナタンの著作「図書館学の五法則」の第五法則。

※図書館が有機体であるということは、心と手をかけず放置すれば、枯れて廃れるということを意味してもいます。

※中央図書館では専門性や資料の集中性が必要です。多摩市の中心的な図書館の状況を、先進的な浦安市や調布市と比較調査した。（１章３.(3)に掲載）大妻女子大松本研究室のカーリルを使った分析は今後の成長方向を示した。

→つながる図書館間の役割分担は、利用者の使い分けに繋がります。そこにあるべき資料へのニーズも変化してゆくはずです。



※図書館の数については、現在の施設数であり、行動プログラムの更新案では、４つの地域館が廃止され、２つの拠点館と本館再整備（行政資料室機能存続）の体制に集約する方針が撤回され、当面施設数は存続し、今後の検討とするとあります。

（２） 中央図書館：全市図書館システムの中枢機能と、より広く深い専門的サービスの部門・役割を、これからの多摩市立中央図書館が担います。

将来の中央図書館では、他市の成功事例を研究して、全出版物に対する収集カバー率や相対中央館アクセス率を高め、ワンストップで目的の資料に利用者がアクセスできる資料の体制を構築したいところです。多摩市内で、もっとも多くの幅広く、奥行き深い、現物の資料世界の中に入り、ブラウジングし、一冊の本を越えた資料の関係性を体感する開架です。

大きな資料世界がひろがる中央図書館の風景

（３） 拠点図書館：通勤・通学や買い物などの、生活に沿った利便な場所、開館時間、日常の調べ物にこたえられる資料やサービスと場を提供する役割を、これからも２つの駅前拠点図書館が担います。

通勤通学の駅近の図書館では、夜間開館や自動返却、予約貸出など、クイックで利便なサービスに重点をおきます。新刊や新聞雑誌など、新しい情報を充実させ、本館との連携で専門性を補完させます。開架室を滞在型に再配置して、人の居場所を充実させて、少集会や展示も取入れたいものです。

便利な駅前にある永山図書館の開架室

（４） 地域図書館：地域の暮らしに沿った、資料やサービスと出会い の場を提供する役割を、歩いてゆきやすい今の場所で、４つの地域図書館が担います。

子どもやお年寄りが日常的に生活圏の中で利用する図書館では、長時間開館や自動化機械貸出への投資よりは、全てに対応できる少数精鋭の職員が、ニーズに沿った資料を揃えて、多様な出会いの場を演出する、ふれあいを大切にするサービスが求められます。地域の学校との連携の拠点にもなります。

地域に向き合う東寺方図書館の開架室

（５）学校図書館：学校の一部である学校図書館は、公共図書館のパートナーとして、協力して児童・生徒へのサービスを担います。学校図書館が活動に必要な、資料構築と司書の研鑽が進むよう支援します。

学校図書館にいま一番必要なことは、新鮮な資料を購入する費用です。学校図書館間での協調した資料選定や学校司書の選書や相談業務のスキルを上げるなど、人に関わる部分で公共図書館は支援できます。学校が掲げるESDは、生涯に学ぶ姿勢を身につけることなので、社会連携が求められています。

※ESDは前項P2-03に解説による。

学校に出掛けて本箱を並べた直接貸出サービス

（６） ネットワーク網：幼稚園や保育園、老人施設、長期療養型の病院、包括支援施設などで、これまでのサービス拠点にアクセスが難しい場合、配本車や宅配メール方式がアウトリーチサービスを担います。

また、それぞれの図書館に近くの団体のご希望があれば、学級招待や開館前利用など柔軟に受け入れ、利用団体との信頼関係が緊密になるように動きます。

病院に出掛けてゆく貸出サービス

2-3. 再生まちづくりの担い手となる図書館

（1）図書館は再生まちづくりの重要な担い手です。

多摩市民の暮らしに役立つ魅力的な図書館があることは、多摩の旧市街やニュータウンの再生まちづくりに、役割をはたします。故郷への帰属感をみんなで大切にするコミュニティを育てます。

① **多摩市の魅力向上：**良い図書館の存在は、居住地選択の上位の要因と言われています。魅力的な図書館が身近にある多摩市は、住みたい都市となります。人口が微増の多摩市ではありますが、人口の社会減をくい止めます。

② **出会いの結節点：**人口の構成では高齢化が進む多摩市ですから、若い所帯の移入が期待されています。団地の建て替えや住み替えでは、暮らしに活気や利便性、出会いの機会を提供する図書館が人口誘引の要素になります。

③ **多世代交流の広場：** 多様な世代が交流して、さまざまな都市活動で、都市に活気が求められるとき、図書館は活動を受け入れる「ひろば」になります。情報、もの、こと、に出会い、自分を確かめるサードプレイスです。

④ **地域コミュニティの相談者：**若い世代、新しい世帯が、多摩市で暮らして、さまざまな課題の解決に困ったとき、図書館は「地域のコミュニティの相談者」になります。相談者として信頼に足る図書館員が待っています。

⑤ **ふるさと多摩市の記憶装置／情報発信基地：**
ニュータウン市民が地域に帰属感をもち故郷を感じられる街づくりは、開発構想の悲願でした。個人の幸せは自己実現だけではなく、故郷に帰属して、孤独を離れ安心を手に入れることができます。図書館は、新旧の住民みんなの「ふるさと多摩市の記憶装置」になります。そして「ふるさと多摩市の情報発信基地」として市民活動を支えます。

（2）新しい中央図書館は中心市街地活性化・魅力化の役に立ちます。

① **中心地に都市の求心力を育てる。**
新中央図書館の候補地の最寄り駅となる多摩センター地区の市民生活の求心力に貢献します。駅からパルテノン多摩、中央公園、新中央図書館へと続く、魅力的なプロムナード環境、そして将来の「知の地域創造」エリアに、市民全体の意識を向かわせるマグネットが、新中央図書館です。

② **歩行者動線の新しいフォーカスとなる。**
中央図書館候補地は、ニュータウン歩行者専用路網の南のフォーカスに並ぶ構想です。魅力的な新しい活動の拠点が、この焦点にセットされて、多摩センター駅から南側に遠い住宅地からの歩行者や自転車動線もこの求心点に集まって、自宅と駅間のバスの往復移動にも変化が起きるでしょうか。コミュニティバスの停留所もほしいフォーカス拠点です。

料理を持ち寄り図書館集会室でパーティ

開架室で、コーラスのイブニングコンサート

みんなで、絵本作家さんとお話をする

芝生の築山を客席に、図書館員が昔風の紙芝居

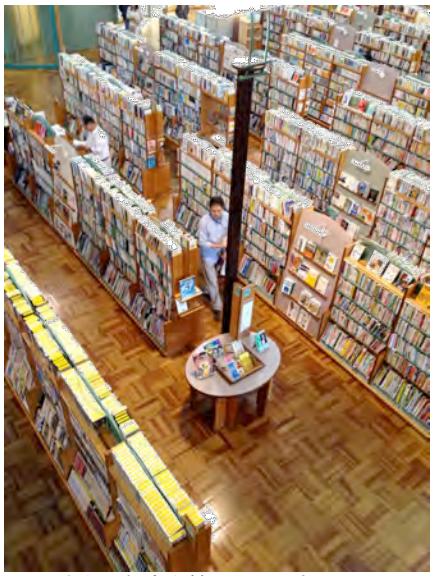
※図書館は都市に住む者のサードプレイスともいわれています。自宅と職場や学校以外に、定まった居場所を持たない都市の通勤通学者にとって第３の居場所となる意味があります。

※現在の本館が再構築された施設を、中央図書館と呼ぶか本館とするか、これも今後の検討課題です。中央館の機能を持つ本館と言われる市民もいます。基本構想では、２章以降の提言部分これは、これを中央図書館、分館を地域館拠点館図書館と整理して呼んでいます。

2-4. あたらしい多摩市立図書館全体への提言

（1）あたらしい多摩市立図書館システムへの提言

多摩市の図書館全体運営のあり方、また個別に、新中央図書館、駅前拠点図書館、地域図書館、それぞれの運営の在り方について、数々の提言を整理しておきます。
このたびの基本構想では「あたらしい多摩市立図書館への提言」を策定委員会や行政・市民グループヒアリングで広範に集めることができました。それら提言をチャート形式で次頁に整理してあります。


おおきな開架室を魅力的にたもつために

（2）全体の図書館運営に関わる３要素のマネージメント

○資料・情報の構築と配置再編と管理について：

・中央図書館には、一箇所でどんな資料にもつながる蔵書、専門的で奥行きのある蔵書、調査や郷土や行政資料の充実が一般的です。
・地域館拠点館には、複本としての子どもや成人むきの基本的図書を揃え、奥行きの資料は中央館から取り寄せます。新聞や雑誌などのニュース情報はインターネット端末とともに備えたいところです。

○職員・組織の構成と配置再編と管理について：

・中央図書館ができても、現有の職員数を大きく増員はできません。
・中央図書館には、企画運営、蔵書構築、地域奉仕、直接サービスなど専門的で多方面の業務に、合理的な職員編成を行います。
・地域館拠点館では、貸出し、子どもを大切にする奉仕、相談業務、地域社会連携など、これら全領域の業務を精鋭の少人数で対応する必要があり、専門性総合性を備えた常勤の館長が期待されます。

○施設・環境の配置と役割再編と管理について：

・中央図書館の施設環境に求められることは３章で述べています。
・分館の地域館や駅前拠点館についても、本館整備に合わせて、順次見直しや充実が必要になるかもしれません。本棚の配置を工夫してサービスデスクに近接させ中心区域として、読書席やブラウジングなど人の居場所を拡大し、滞在型に充実させてゆきたいところです。

○経営バランスの企画調整と、投資対行政効果の検証について：

・各館の休館日（曜日）や開館時間をずらすなどして、利用者の不便が大きくならないようにしつつ、運用経費を圧縮できるような改革を工夫し、資料費の拡大分の捻出や直営の持続を図りたいものです。
・先進他市で見られる毎年の図書館歳費と行政効果（市民サービス）の検証と情報開示、翌年度への重点事業項目への反映も必要です。

（3）図書館協議会など専門的な諮問機関の役割について

・図書館協議会は、館長が意見を求めて図書館運営について答申を参考にする重要な機関です。専門性、地域性、社会要望、学校連携、など多様な視点が反映できるように編成の充実が市民から望まれています。
・協議会委員には学校長代表もいます。市域全体の図書館活動の一部として学校図書館にも連携や支援の意見を述べますが、学校図書館自体の充実策は、教育委員会や教育担当課の領域です。市立図書館が学校図書館を連動させた他市の事例研究も、今後は必要になるでしょう。

（4）それぞれの図書館の利用者懇談会や友の会など市民グループとの協働の試み

・多摩市では文庫活動など子どもへのお話会や障がい者支援にボランティア活動はありますが、読書会や図書館友の会など市民応援団が本館地域館ともに、先進図書館のように生まれませんでした。
・「図書館フレンズ、図書館には友人が必要です。」という、米国は宣伝文がありますが、多摩市の図書館にも友人が期待されます。

お話会という図書館との出会い

２−４. あたらしい多摩市立図書館全体への提言

（策定委員会の意見、協議のベースとなったヒアリングなどから紡ぎだされた提言）

「提言チャート」	資料世界 ＜本・情報＞	図書館員 ＜人・組織＞
図書館本館 ＜中央館＞ ・来館者への直接サービス ・非来館者へのサービス （アウトリーチサービス） （情報系ＩＣＴサービス） ・資料群構築センター （テクニカルサービス） ・政策／企画／総務	**カルタ01/本・現本館** ○広い開架スペース（たくさんの開架資料） ○見つけやすく、課題解決につながる資料。 ○世界を体感できる豊かで深みのあるコレクション。 ○児童書を幅広く収集。 ○開架室にある本の出版年、古い物が多い。 開架室が広くなると魅力が維持できない。 ○資料費が継続的にある程度必要。 ○将来は電子的資料やデータベースなどが増える。 ○ＰＣネットワーク，情報媒体が今後重要。 ○広い閲覧スペースとＷｉ−Ｆｉ環境。 ○有料データベース提供、利用者端末の配置。 ○ＥＳＤの観点を図書館にも。 学習する上で、学校にある資料では賄えない。 ○予約受付件数が多い。 ○必要な資料が手に取れれば予約をかけなくて良い。 ○働き盛りの世代に需要のある専門性のある資料は中央館に集まっているとより効率的。 ○館ごとの蔵書規模が小さく専門的な資料を置きにくい。３０万冊規模になると網羅的に置ける。 ○仕事・資格・働く気持ち応援の資料 ○図書館が市民の問題を支援 いじめ、離婚、同性婚など様々な問題に対して図書館がブックリストを作成。 ○行政資料は、中央館で充実。 ○資料の所在を固定していない。 ○館籍を付けて再配置が必要か。 ○資料が返却された図書館に配架されるしくみ、全体の蔵書バランスと資料管理の方向性を検討。 ○地域館からも購入のリクエストは上がるが、本館で選書・見計らいをしている。 ○収書方針 多摩市がどのような基準で蔵書を集めてゆくか議論しておいたほうが良い。 ○ベストセラーを早く読みたいという要望と厚みのある蔵書構成になるという論点。 ○行政資料のＰＲ。	**カルタ02/人・現本館** ○課題解決型サービス・ビジネス支援 新しい話ではない、市民の自己実現への支援。 ○働き盛りの人への高度なレファレンスサービス。 ○レファレンス機能の強化や働き盛りの世代への情報提供の強化。図書館は「ワンストップ窓口」 ○起業，商品開発，就職活動情報，就労、市民一人に図書館組織が応えていく。 ○児童サービス：読み聞かせ、おはなし会 ○ティーンズサービス ○地域向けサービス ○多文化サービス：資料収集を始めたい。 ○高齢者向けサービス：思い出語り回想法 ○ＳＮＳなどでの発信も必要。図書館でイベントをやっていても知られていない。若者に向けて発信。 ○就業支援で、地元に根付いた仕事を紹介。 若者の定住につながるのでは。 ○学校図書館支援は本館で行っている。 ○行政支援 市役所を支援することも重要。市役所の課題は、市民の持っている課題ともオーバーラップする。行政マンが効率よく仕事をすれば、市民の生活も良くなっていく。 ○経済の活性化や市民の健康は、行政の課題。 ○行政ブランチ、行政情報の提供や手続きの支援などもできれば良い。 ○介護や健康相談、社会的なサービスについて、なんでも聞ける窓口は、図書館では難しい。 ○課題解決支援ができる「司書の特別養成」 ○資料を活かすには司書の働きが重要。異動のルール化含めて、職員を育てる工夫を考えたい。 ○他自治体はどんなサービスをしているか、研究が必要。将来的なことに考えを進めるべき。
図書館分館 ＜拠点館＞ ＜地域館＞ ・関戸　・東寺方・豊ヶ丘 ・永山　・聖ヶ丘・唐木田	**カルタ05/本・拠点館** **カルタ09/本・地域館** ○乳幼児を含めた児童へのサービスを手厚く。 ○高齢者に必要なサービス、医療や健康の情報。 ○新聞雑誌などの更新されるコンテンツを充実。 ○通って楽しいのはベストセラーがたくさん並んでいるような開架室だけではないだろう。 ○資料は司書が考えて揃えるのが良い。 ○調布市や町田市の地域館の蔵書構成 ○地域館の蔵書構成は地域館の職員が責任を	**カルタ06/人・拠点館** **カルタ10/人・地域館** ○障がい者サービスは中央館に移すのか、永山か。 利用者の多いところで行うか検討したい。 ○視覚・精神など様々な障がい、個別にサービスをしなければならない。 ○働き盛りの世代の利用に応えるには難しい。 ○サービスの質とレベルと規模が共通の問題。
全域奉仕 図書館システム ＜ネットワーク＞ ・行政資料室 ・幼稚園保育園 ・(学校図書館支援) ・病院/老健/包括支援施設	**カルタ13/本・ネットワーク** ○病院図書室との連携・配本サービス 患者が前向きになる読書を届ける。 ○市民活動資料、新本館にも置いてほしい。 ○学校図書館から市立図書館の資料の検索ができる。	**カルタ14/人・ネットワーク** ○学校図書館は、全校司書を配置している。 ○学校図書館に週３回の連絡便運行。互いに資料費はきびしいが，オンライン環境等で支えている。 ○行政資料室に資料は置いているが、活用されるよう工夫ができていない。
	資料世界 ＜世界表現性・地域性＞	図書館員 ＜専門性＞

○「知の地域づくり」「知的地域再生」
図書館計画とまちづくりは重要なテーマ

○基本計画では「もののデザイン」へ。
基本構想では「ことのデザイン」から。

図書館施設 ＜場・環境＞

カルタ03/場・現本館

○ラーニングコモンズのような市民が交流できる、自由に声を出して議論ができたりするところ。
○画一的に静かにするのではなく「利用目的によって音環境デザインを変える」
○メーカースペース：編集，３Ｄプリンターがあり支える図書館員がいる。開架室にあるとよい。
○子ども未来会議や中学生サミットを図書館で。
○未来志向の学習の場。調べる・発表する、会議。
○20代の若者を誘引する集まりやすい環境づくり。
○カフェやたまり場、中高生には自習スペースがあると活用される。
○常設で子ども用の文化財展示スペース
○ふるさとのことを知ることができるコーナー
○ベビーカー置き場，おむつ替え，授乳コーナー
子連れの来館をしっかり迎えたい。
○おはなしの部屋：読み聞かせの環境。
○賑やかな子ども開架室が共存できる配置計画を。
○多摩市で出版しているものは販売したい。
中央館で販売コーナーが作れるとよい。
○図書館を居場所として活用。一人でいることができる、邪険に扱われない。人との出会いもある。
○図書館の利用を情報収集だけとは捉えずに時間をゆっくり過ごすことを提案してもよい。
○マルチカルチャーを目指すべき。20年後，30年後を見据えた図書館やバルテノン多摩であってほしい。
○図書館本館は中央公園を大切にした配置計画になるように期待したい。
○公園と図書館が一体になる計画、アプローチで「緑陰読書」ができるようにしたい。
○歩いて図書館に来る人は公園の道を使ってもらえるように（高低差昇降を）整備してはどうか。
○自然観察会を図書館で行うこともできるのでは。
○公園側のアプローチは多様な可能性を秘めている。
○環境に配慮した「グリーンライブラリー」をめざす。
○車でのアプローチは大切。（弱者のための車）
○中央館敷地は高齢者にとっては駅から遠く思う。アクセスの補助については大きな課題がある。
○気軽に魅力ある中央図書館に行けるように、巡回のマイクロバスが運行すると良い。

カルタ07/場・拠点館
カルタ11/場・地域館

○企画展示は大切。
○おはなし室がほしい。
○おはなしコーナーの利用と一般利用者との調整。
○広くはないのではしゃぐ声と調べ物の利用者がバッティング
○喫茶コーナー、ほっとする休憩コーナーはよい。
○気軽に足を運べる空間。身構えずに入りやすい図書館。
○高齢化社会。健康などの情報が得られる、気軽に身近に杖をついて行くことができるところ。
○子どもが利用しやすい。
○乳幼児期に絵本の読み聞かせができるスペース。
○地域の居場所づくりを図書館が背負うことか、地域コミセンが提供すれば良いのでは。

カルタ15/場・ネットワーク

○地域館の老朽化、リニューアルの必要性。
○大規模改修の時期にあわせ改修計画の研究を。
○地域包括支援センター複合案。地域の人と議論を。
○現在のサービスでの地区館とすると規模が小さい。
○普段の生活で目につく位置、駅近くの市の用地に図書館に関わる情報を出すモニターが欲しい。

市民利用者 ＜活動・協働＞

カルタ04/活動・現本館

○図書館では障がい者サービスや児童サービスでボランティアが協力。
○サービスの受け手となる利用者のヒアリングとボランティアグループのヒアリングを行う。
（音訳・点訳を行っているボランティア団体など）
○市民と図書館が直接意見交換できるように。
市民グループは、今後も直営維持を希望している。
○高齢化率が高い地域の世代構成の流動化が予測される。若い人に魅力ある図書館本館づくりを。
○図書館が多摩への移住を誘うセールスポイントになるとよい。
○年齢を重ねたひとたち、障がい者、子どももいて賑わう図書館であってほしい。声を出してもよい、気軽に利用できるような施設。
○図書館協議会の活性化
定数を元に戻して、若い方や障がい者グループの枠を設けたい。協議会も増回するよう考えたい。

カルタ08/活動・拠点館
カルタ12/活動・地域館

○基礎調査や諮問答申どれにも中央図書館の大切な仕事に、地域館を支援するとある。
○反対運動もあって地域館が残ることになったが基本構想には、変遷がわかるような記述が必要。
○活動室であかちゃんおはなし会をやっている。
安全な、おはなしスペースがあれば。

カルタ16/活動・ネットワーク

○学校で出前おはなし会。ボランティアが活躍。

マネージメント ＜運営＞

○できるだけ効率化。
ＩＣタグの導入で自動貸出や返却、書庫の出納も早くなると聞く。
○個人貸出冊数は全国平均の倍の実績。
サービスの成果としては成功。
○コストを下げる工夫をするか、
他のサービスの充実を目指すか。
○リクエスト件数が多い。
どう維持していくか。
○組織そのものの見直しが必要。
○常勤職員における司書割合は52.3%。
嘱託職員の司書割合は100%。
○多摩市の司書割合は全国では平均的
○専門的な正規職員の採用や職員をどう動かしていくか検討が必要。
○図書館の自己評価・外部評価の
実施と公開を行うべき。
○地域館・拠点館
本館と分館でよいのではないか。
○拠点館は駅前にあり、他市の分館と比べても規模が大きい。
開館時間も長く、蔵書規模も大きい。
ターミナルにあるので利用のされ方は違う。地域館と分けて考える必要はあるか。
○大きな本館と小さな分館という
運営もよいか検討。
○唐木田図書館の委託運営。
市民からは直営化の検討を要望。
○人口構成・ニーズの変化。
福祉行政に職員が必要になっていく。
○正規職員から嘱託職員に業務移行を工夫しているが人員配置が厳しい。
○直営で専門職がいて、どこの館でも同じようなサービスを受けたい。
○地域の貸出ﾆｰｽﾞに応えることも重視。
○市の政策や将来予測も基本構想に反映。少ない予算をどう活用するか。
○１０年２０年先に高齢化したところで世代交代が進み人口が増えるか、街の状況の見通しが大切。

図書館施設 ＜ひろば性＞

市民利用者 ＜市民性＞

ﾌﾚｷｼﾋﾞﾘﾃｨ＆ｻｽﾃｨﾅﾋﾞﾘﾃｨ ＜持続可能性＞

◎ トピックス：　多摩市が進めている 地域関連プロジェクト について

多摩ニュータウン再生

多摩ニュータウン再生プロジェクト

平成28年３月に策定した「多摩市ニュータウン再生方針」のもと、多摩ニュータウンの再活性化と持続化を図っていきます。

本方針の取り組みを着実に進めることにより、大規模団地の更新や子育て世帯の流入等を促進し、住民の高齢化や団地等の経年劣化に対応していきます。

多摩ニュータウン再生に向けた３つの個別目標

- 人と環境に優しい都市基盤・拠点構造へ再編する
- 惹きつけられ、住み続けられるまちを実現する
- 多様な主体が協働して循環型の地域サービスを育む

●公共施設の見直しとの関連では……

現在、東京都が進めている都営多摩ニュータウン諏訪団地の建替えをはじめ、今後他の都営住宅についても更新が見込まれます。その際には、学校跡地等を建替え用地として活用したり、都営住宅との合築により、市の負担を抑えて施設の更新や整備を行うなど、公共施設の見直しと両立し、相乗効果が発揮できる方法を検討していきます。

健幸都市（スマートウェルネスシティ）

smart wellness city

多摩市は、だれもが健康で、生きがいを感じ、安全・安心に暮らせるまち、みんなが笑顔で幸せを実感できるまち、健幸都市を目指しています。

健幸都市の実現に向けて、高齢者も障がい者も住み慣れた地域で生活を続けられるように、地域ぐるみで支える「多摩市版地域包括ケアシステム」の構築や、「歩くこと」、「外出すること」が楽しくなるような都市環境の整備、市民のつながりを育む取り組み等を進めていきます。

平成28年度は、市民ワークショップや外部有識者会議等にて、市が目指す健幸都市の姿やそれに向けた取り組みを検討していきます。

皆さんの地域での活動が、明日の健幸都市につながります。

一緒に多摩市を健幸なまちにしていきましょう！

●公共施設の見直しとの関連では……

公共施設の老朽化や厳しい財政状況の中でも、今ある施設の機能を地域の世代構成や新しいニーズに対応したものへ転換することや、ハード（施設）からソフト（事業）へ転換すること等により、将来にわたり持続可能な健幸都市を実現していきます。

安心して暮らし続けられるまちを目指し、取り組みが本格的に始まります

人口減少や急速な高齢化等を迎える中、さまざまな課題や新たなニーズにも対応していくため、多方面から取り組んでいます。

公共施設の見直しと将来像　みんなで考えよう　多摩市政策情報誌 vol.3

持続可能な多摩市の未来に向けた挑戦

パルテノン多摩

●改修により、多くの市民に親しまれる公共ホールへ再生

パルテノン多摩は、昭和62年に開館してから、文化芸術の振興だけでなく、年間50万人を超える集客による経済効果等、多摩センターににぎわいをもたらす施設となっています。築29年目に入った建物の設備等は使用の限界を迎えていますが、突然の不具合による利用停止や講演中止は避けなければなりません。さらに、文化芸術活動の拠点施設として市民に親しまれる、また自然と人が集まるような公共施設として再生するため、施設の大規模改修を行います。同時に、多摩中央公園をはじめ周辺施設と一体的な整備を行うことで、多摩センター全体の活性化を図っていく考えです。改修に向けた市民参加の基本計画策定委員会でご意見をいただきながら、市民の皆さんに親しまれ、愛される施設として平成32年度の開館を目指します。

４．図書館本館の整備を進めます

図書館

●本館の恒久整備と図書館全体の仕組みの見直し

平成30年までの暫定として旧中学校校舎を改修し使用している本館は、施設の安全確保や図書館サービス全体の維持、時代に合わせたサービスへの向上を行うため、再整備します。本館整備と合わせて、図書館全体の仕組みを見直し、地域に必要なサービス内容や運営体制について検討します。

整備地については、鶴牧倉庫跡地から変更し、学校法人桜美林学園との間で、現本館用地と交換を進めている多摩アカデミーヒルズ用地の一部で整備する予定です。施設整備や維持管理については、民間のノウハウや資金を活用する方法を検討するとともに、土地交換で生じた差額の収入を整備費用に使用します。

図書館本館（旧西落合中学校）

鶴牧倉庫（旧管路収集センター）

●売却や貸付等の再検討

図書館本館の整備予定地として民間施設との合築による施設整備を行う方向性を示していましたが、検討した結果、民間による施設整備のメリットが少ないことから、売却や貸付等に向けて検討を行うこととしました。

パルテノン多摩

※トピックス出典：
多摩市政策情報誌 vol.3より